

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十八年三月二十五日 印刷
昭和四十八年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五五一号



No. 551

四月号



清酒
日本盛

灘
西宮酒造 釀

ニホンサカリ

超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリツトル詰・一、四一〇円



えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛



国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

風光明媚な
海岸美を
誇る

株暴騰唇かわく反戦歌

ベトナムから聞こえてくるよな黒田節

彼の女は音痴折角のセレナード

ぎこちない握手でうるさ型封じ

春宵一刻チヨコの重さもお氣に入り

中島生々庵



「不愉快なこと」

朝日の「今日の問題」という今日のコラムに、或る高校の卒業式で「君が代」斉唱に卒業生がほとんど起立もせず歌いもしなかったと記事を載せ、もっとも三年間受験用の技術ばかりつめこまれた生徒にとっては、そのもどかしさにたまらず、せめてものうらみを卒業式の中に示したのだとしたら、あながちその非礼をのみ責めるわけにも行かぬ」と結論している。

私の所属するロータリークラブで、毎月第一週の例会の冒頭に「君が代」を斉唱するな

らわしになっている私の頭では、正しい判断が出来ぬかも知れぬが、たまたま三、四年前に読んだ手塚富雄教授著の「いきいきと生きよ」の中で、「わたしたちは結局何を目ざすべきか、世間を知り、それを軽蔑しないことだ」「不愉快を感じることもわれわれは自分の役に立てねばならない。それも生の一部份、いや、大部分なのであるから」というゲートの言葉のうけとり方を解説して居られるのを更めて感銘深く読み返したのある。

川柳塔四月号

川柳塔四月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

不愉快なこと

恍惚の人

川傍柳初篇研究…(百十七)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄・十府・岡田甫

「旅人」以後の麻生路郎作品

(23)

サイゴン1月28日午前8時

川柳塔(同人作品)

水煙抄

一分間の柳論

秀句鑑賞…(同人吟)(水煙抄)

追憶

座右の句

みの虫の何ほ匍うても壁だった

(豆秋)

私の句

寝たきりの七十になり世の流れ

浅川八郎

中島生々庵…(1)

菊沢小松園…(2)

傍島静馬…(22)

東野太八…(24)

若本多久志選…(4)

北川春巢選…(30)

児島与呂志…(46)

吉田水車…(47)

西尾栗…(44)

川村好郎…(45)

麻生葭乃…(29)

連作

恍惚の人

菊沢小松園

恍惚の人の部屋だけ灯がともり

月光へ我が家を探す恍惚の人

恍惚の正気な時は物言わず

人間の正体がこれ恍惚の人

恍惚の人へ富士は歪んだまま聳え

死んだ娘の写真離さぬ恍惚の人

馳け出して突如尾行をまかんとす

恍惚の人もそわそわ祭の灯

恍惚の人限界に触れさせず

信号は赤でも渡る恍惚の人

恍惚の眼に人世の空廻り

警察も笑って恍惚の人引渡し

恍惚の人ずぶ濡れのまま歩き

食べものの名前すらすら恍惚の人

恍惚の今日はカメラへ正座する

恍惚へ関りもない家系の譜

恍惚の人血の縋りの眼を通れ

恍惚へ鳩の群れさえ飛び立たず

易の灯へ恍惚の人立ち止まり

恍惚の人に地蔵が撫でられる

風に散る枯葉の中を恍惚の人

川柳中山道六十九次：(3)

富士野鞍馬

(42)

川柳と歎異抄

戸田古方

(46)

近詠

諸家

(39)

一塊の

高鷲亜純

(39)

路郎川柳以後のわれら

(26)

谷垣史好・香川酔々・有信新之助

榎・小松園

(38)

一年をかえりみて

光武弦太郎

(53)

海老の尻尾

(40)

雑筆春秋

香川酔々・飯田悦郎・河内天笑・吉田水車

雅号ぶっちゃければなし

小谷仙山(51)：渡辺蒼句

(59)

初步教室

本田恵二朗

(50)

大萬川柳「長男」

川村好郎選

(52)

柳界展望

(新之助)

(56)

本社三月句会

(庸佑)

(54)

各地柳壇(佳句地10選)

葛城伊三郎選

(48)

一路集

青木遊星選

(49)

「鼻」
「合」
「い」
「鍵」
「柱」
「る」

村上旭童選

(48)

編集後記

(一三夫・葉子)

(63)

座右の句

食欲が出てきた涙忘れまじ

(好郎)

私の句

刺の無いバラになりたい割烹着

小野克枝



恍惚の犬に挨拶して通り
事故現場恍惚の人無表情

野良犬に恍惚の人見上げられ

恍惚の眼に紫雲たなびくお出迎え

恍惚のまだまだ生きる顔の艶

残月一声恍惚の人突如泣く

食卓を叩いて餓鬼となる恍惚の人

筆取れば恍惚の人と思われず

縄張ったことを恍惚斜に抜け

恍惚の人とも知らずビラ渡し

恍惚の昨日も今日も物言わず

生き過ぎたことを恍惚知りはじめ

恍惚の自動扉に吸い込まれ

恍惚の人も通れぬ物価高

恍惚の尿りに芝生浮き上り

片割れの月へ尿す恍惚の人

恍惚の濡れた脇間へ春の風

恍惚の嫁女の指より触れさせず

嫁の手に溺んで夜半を放尿す

恍惚の臭気紛々黄金仏

恍惚も来世を願う掌を合せ

恍惚のだんだん仏の顔になり

死の影に今朝から無理も言いはらず

恍惚の耳へ涅槃の鐘ひびく

恍惚の仏の涙透き通り

大団圓なみだ果して何色か!

小松園



若 本 多 久 志 選

青森市 工藤 甲吉

雑巾のように寝たきり死んでいた

稗飯を知る人米を大事がり

金バッジから俗物になりさがり

還暦かアハハ少年老い易き

残飯で一茶は雀呼び寄せる

青森の冬はミカンを寒がらせ

半分に割って小さい方を取る

妻もまた事なかれ主義のリンゴむく

子のための合鍵がないもどかしい

人が人えらぶ愚かさ繰り返す

握手した掌の冷たさを味方とも

鍵の音させて人生軽んじる

大阪市 金井 文秋

雑然と部屋散らかつて満ち足りる

炭のある暮しに驚くのも時世

ぬいぐるみ添寝する子へ温たかし

排気ガス並木も他所へ行きたかる

子ぼんのう子から逃げたい日の疲れ

自信ないからだで旅の夢を追う

捨て猫の愛想に辻を曲りかね

ずっと傘さしかけ都会の誘いが来

ご機嫌になって戻れば妻も留守

プレハブのひとりぼっちは淋しいね

片ちびの下駄がうれしい山の宿

尼崎市 黒川 紫香
倉敷市 水粉 千翁

太陽の笑顔この子を見飽かない

笑えない話わたしになって聞き

安らぎの膝をくずして子に老いぬ

つつがなく膳の広さのめおと箸

運命をからませてから愚痴となり

岡山県 直原 七面山

地球自転 我が家は妻を軸として

夜を彩る女の夢の虹に似て

燃え切つて決断迫る女の目

控え目に笑い心に期するもの

ユーターンの子が鎌を磨ぎ鍬を振り

岸和田市 高橋操子

子はすでに世界の地図の中に生き
さからわぬ妻が知つてた社の赤字
引かれ行く牛は売られた事を知る
かぎつ子へ希望もたせて夕焼ける
沈む日へつつがなき身の手を合せ

高槻市 若柳潮花

元旦の雨さいわいに風邪と寝る
心傷を縫わんとすれば糸がなし
閉じた眼の底に十九のままのひと

花代子入院

カンフルへ身動き一つ出来ぬ妻
個室ポツンと深夜の灯がともり

倉敷市 本田恵二朗

ほこりたてまい心の歩道そつと行く

底知れぬ大器多くを語らない

名社長若手に持たす花を選び

青い主張かざす若さが頼もしい

(老母九十才を迎える)

九十本の年輪万円の器めく

大阪市 本多柳志

焼け木杭に火がつきそうもない自嘲

目鏡かけ更えて見直す相場欄

早よ行かな上りまつせと交通社

水引をかけて硯が見当らず

国会開会式

むつかしい世とは陛下もお気がつき

豊中市 戸田古方

南紀早春

法楽焼うっかり塩を口に入れ

立春の朝は港の雨で明け

目ざし屋で目ざしの売れるのを眺め

ひょくくりと椿見つけた道成寺

男の買うみかんちつとも安くない

宇部市 石川汎流洞

駅の灯を残して吹雪く村眠る

押えれば愛は炎となる定め

胸さわぎ行く手を黒い雲走る

マフラーを外すと寒い梅日和

乳搾り牛もわかつているワルツ

高槻市 福田丁路

春が来た足の不自由な子にも来た

時既に遅き南無観世音

求人のもれも優遇するとあり

天を突くビルの谷間の地藏尊

月は臙に血圧も物価もあがり

大阪市 山川阿茶

白粉も紅ものつゝる喜寿むかえ
夢十夜色ある夢を見直され
春雨にまちがいなし春立てば
ざあまずとおますが心ブラ法善寺
浅間山私も爆発してみたし

大阪市 吉田圭井堂

安普請うぐいす張りの音も出る
サーピス料きっちり取ってバイキング
風邪だけは仲よう引いて倦怠期
ようもまアここまで来たと古稀の春
參考に養老院も覗いとく

宝塚市 傍島静馬

おびんずる光りいや増す入学期
新婚三月そろそろお菜不味くなり
新妻の眼をかすめてかける味の素
息子より派手なおやじのカーデガン
温泉めぐりの老妻は十ほど若返り

倉吉市 奥谷弘明

小役人牛を手本にして歩き
求め合う強いきずながあって父子
何時死んでもの気に俺もやとなれ
制服をタイトに変えて女めき
俺よりも炬燵を好む妻となり

大阪市 天正千梢

貝殻を沢山つけて老朽船
小っちゃなふれ合い犬に餌やりながら
耐えているのでしよう目の色で分かり
降り続く雨をも神に礼申す

岡山県 浜田久米雄

立腹はおよしなさいと花が咲き
一万円を崩して来たは三日前
相性をあきらめきって夫婦老い
また替えたお色直しに指を折り
日本髪生き延びて来た目にたのし

倉敷市 小野克枝

おんな妻 自問自答の白い壁
褒められた料理覚えている女
一徹な父にも誕生日があった
別れてきて未練沈める海が無い
今日生きている幸せの髪を梳く

大阪市 神谷凡九郎

必ず死ぬ生命そやから大切に
欲と云う糸がもつれて人間図
続くつづく続く朝昼晩がまた明日も
自問自答自己懂着に突きあたる
ひよっとするとなない明日かもしれずだが賭ける

和歌山市 垂井葵水

持つ物を持って臆病に成っちゃまい

ことごと純情すぎていた裏目
正直という行列で順を待ち

吸い込まれそうな怒濤の齒を呪う
新妻のペンほのぼのと生活の詩
清濁をあわせて飲めぬ胃の弱さ

泉佐野市

阿 万 万 的

住民無視ハイウェイだけ雪がない

地のひとの暖味に似て芽の赤さ

石仏雪には雪の顔で立ち

ブルドーザー土の匂いを知ってるかい

想い出をたどる小川がない故郷

神戸市

小 浜 牧 人

池を埋めて村は歴史を変えてゆく

未完のドラマへ定年の幕が下り

根性一筋男の耳が潰れている

売り上げが落ちて二月の腕を組む

花へ私語洩らして女ひとを恋う

藤井寺市

西 い わ を

紫の色は尊く堅苦し

へそくらぬ妻が大きく見えて来る

春淡くして白魚の踊り喰い

いま此処に一期一会を大切に

さよならを云うと別れとなる響き

香川県

三 井 醉 夢

兄妹大学受験

隻眼の子に三度目の狭き門

わが道を引く隻眼の子を信じ

受話機持つその一瞬の祈りかな
合格の電話を待って落葉たく
めでたさは半分浮かぬ親心

東大阪市

宮 西 弥 生

ポケットの手と手からんで冬温し

忘却がほしいある日の女揺れ

貯めている女へ噂近寄らず

運勢に疑問ある日の行きづまり

拒否反応示した女の身のやりば

米子市

八 木 千 代

意地ひとつ岐路の女の灯ともなり

遠いとおい記念日を妻まだ憶え

菊一枝新居の主として活ける

あと味もすがしベストを尽しきり

損をした株のその後を見続ける

大阪市

有 信 新 之 助

持ちつけぬ金で気前のいい賽銭

滞りなく済んだテントに雨がくる

猶疑ありこころ貧しく暮れにけり

夫婦の断層に酒がしみてゆく

磨崖仏を拝んだ風がやわらかに

八尾市

高 杉 鬼 遊

改造論ばくでも土地を持てますか

風の中真実一路の鈴を振る

脚を組む観音さまへ掌を合せ

手で歩くことを覚えた車椅子
出勤簿わたしを殺す判を捺す

東京都 増田次章

うち込める仕事と誇れる友と妻
誠意もう通じぬ友の背の丸さ
恥部抱いて生きているから詩があり
胸ちよっと痛み走った嘘で済み
ギリギリの処で善意にある弱さ

松江市 小林孤呂二

私立でも好いよと言えぬ父であり
新産都市たんぼは派手に売れてゆき
有難やほうれん草の続く日ぞ
負けている君の紫煙は糸をひき
弾力のない靴音よ春浅き

笠岡市 高木桃里

初夢を日誌にしるしひそと病み
恍惚の一間で冷える肩を寄せ
出稼ぎの仲間に入る牛を売り
父と母と坐った位置に妻と居り
運転手まかせて廻る京と奈良

堺市 河内天笑

泥酔へうちもいっぺん酔うたろか
酔うてはる証拠に勘定もってくれ
風船がバンザイをして売れ残り
貨車をただ見送るだけの案山子かな

能面の中でシグナル出す女

兵庫県 遠山可住

手のとどかない立札が建って売れ
腕組みをして決断の念を押し
読まれとうない日記が書き綴る
畳の上で死ぬしあわせを望みかけ
ライバルの棺を見送る濡れながら

大阪市 児島与呂志

人間の弱さは人間には見えず
十二月の風へ男きびしい胸を張り
寒空をさけて地下道腕を組み
ころころ松ぼつくりの夢があり
公害の空にきれいな虹が散り

平田市 久家代仕男

おでん屋も湯豆腐の形切り詰める
無住寺の春陽にこぼる軒雀
物真似の身ぶりがお茶を吹き出させ
三味吊し唄くちにせず芸妓老い
北風が唸る自虐の鞭として

守口市 羽原静歩

雑草でよし春の野に生きている
カッパ糊女の朝の詩があり
鳩時計鳴る午前二時のペン走る
かぶりつき男心はピエロの瞳
春風を斬ってスクールパスの顔

和歌山市 野村太茂津

裂帛の気合に年輪の冴えを見せ

隙突けば隙なく竹刀風となる

遠慮する竹刀を打って捲き落とす

インテリの竹刀は頭悩で打ってくる

道場の隅へ追い込み隙をやる

八尾市 香川酔々

岡寺で飛鳥の春を告げる鶺鴒

白鳥の御陵見おろす鴉の巢

美容師の腕保証する知事の額

土地ブーム赫く錆びつく耕運機

たばこ屋に美人は不要販売機

鳥取県 鈴木村諷子

自負心は影の男もしかと持ち

手も足も出ないダルマにいいところ

早よ干した順に大根皺になり

となりまで来たハネムーン羽田発

精神的評価の方は知っています

米子市 林瑞枝

女の歴史写し鏡台今日も暮れ

老いの汗安値続きの蔭で泣き

こればかりはまだ授からぬと娘の便り

親友の鞭せんぶりに似る効能

働いて貰う孝行もある長寿

倉敷市 野田素身郎

顧みて忸怩永年勤続賞

結論が出て猥談に移行する

師の句拝借してスピーチ締めくくり

媒酌人にも危惧はなきにしもあらず

金があるなら金の力を借り給え

竹原市 時広一路

本心を忘れたビエロかも知れず

愛一つ果なき空へ背伸する

演技することに哀しい性を見る

シナリオを書き直しつつ人生譜

四捨五入切捨てばかりとは哀れ

今治市 越智一水

芽ぶかんとするはだかの木のたくましさ

いい友を持って財産とも思い

値上げには足なみそろえるライバル社

人妻をものにした夢とはゆかい

処世術心と別な笑い見せ

京都市 松川杜的

北陸路の旅に

琴柱灯籠カメラの順を待たされる

白山の雪をゆっくり泳ぐ雪

明けられぬ窓で湯の宿味気なし

何処をどう廻ったか忍者寺元の位置

雲と来て雲と語らん一人旅

富田林市 岩田美代

こぶ豆がふくら煮えた心ひま

ほは染めて不思議がられた淋しい日

悔多し舌に残れる柿のしぶ

凍てし手を言訳にして手を重ね

(節分)

憂き事が重なり豆を強く撒く

新宮市

大矢十郎

値上りの株に血の氣のない温み

育つのが好き盆栽へ言えぬ世辞

財産を聞かず子の数聞いてくれ

大正二桁四方八方耐えるのみ

コーヒーのせいにしておく午前二時

大阪市

黒田真砂

音立てて崩れる愛の行方見る

七曲りして目標まだ遠く

無味無臭みたいな人と二十年

追いかけて夢のつづきが見度い朝

ファッションショウ

大賞に相応しイブの裾揺れる

大阪市

川口弘生

句友 岡部シゲさんの死

予防注射みんな済まして大往生

句友 大西為二氏を悼んで(一句)

雲の上もう勤務中でない句会

リバイバルどこか入れ歯の音がする

親おれてホームドラマの幕おける
我を折って中年の男わびしい日

美称市

安平次弘道

病弱な父へお医者になると云う

満されぬ主婦そそのかすメロドラマ

ワラつかむ心へ邪教のタイミング

冗談冗談と顔色は読んでいる

子の手術無神論ではすまされず

新宮市

川上大輪

賽銭箱の前で硬貨を確かめる

出世せぬ男で今日も米を研ぐ

子と並ぶ母には高い傘の位置

長男誕生(二月七日)

男の子ですと看護婦そっけない

抱き上げて愛の重さを確かめる

倉敷市

松下梁水

下積みの譲れぬ主義を一つ持ち

部分品接なぎ合わせて夫婦です

美辞麗句その空間で散る火花

愚かさをまたくり返す人生譜

自信また崩れて積んで凡夫です

広島県

高橋鬼焼

雨音のはげし飯場に昼の酒

聞きかえす言葉に冬の風が鳴る

肩書がほしい名刺をだしそびれ

造花ふと春を咲きたい日のあせり
灯が一つ過疎に平和な夜がくる

大阪市 宮尾 あいき

派手な服顔の小じわを目立たせる
耐寒の鉢へ陽だまり追うてやり
逆境に泣かずテレビへ泣いている
悔有る日夫の遺影へ目をそらす
百力日夫へ覚えた般若経

大阪市 小出 智子

三寒四温老母へ長い文を書く
寢息にも個性があつて兄弟
靴磨くその目その日の靴の艶
諦めのよいのもよさのうちとして
滔々と心に流れる河を持ち

竹原市 森井 菁居

子の爪をパチリパチリと夜がまろし
傷心へせめても磯の陽が優し
あきらめがつかぬうつろへ酒を酌ぐ
四面楚歌酒徒の汚名を良しとする

長女「愛」小学校へ入学

制服がしゃんとさせたのかも知れず

京都市 都倉 求芽

生き血吸う魔性あらわに爪の色
冬が破れて沈丁花洩れてくる

慰めの言葉は考えぬいた嘘

四季咲きの肥料となつて酒を酌ぎ
立ち話何んでこんなにウマが合い

宇部市 平田 実男

出すことになる目のごみでもしぶり
爪つんでもらう仕合せそうな顔
妻の白髪抜き抜き老後を考える
ふたありを愛せる性にある悲劇
沈黙は金庭石にある重味

東大阪市 竹中 肖二

枯草の実を恋猫が付けて来る
早春の寺へ我慾を置いて来る
使い捨ての世に果敢なきは老の職
生命の神秘へとまどうコンピュータ
初舞台主役は宙を踏む思い

鳥取県 川崎 秋女

古里へ六十の意地すてきれず
苛立ちをかくす朝餉のパンが焦げ
臆病な女に変えた師の一語
サテ何を着よう五十の春の色
混浴へ女ごころをちらり見せ

島根県 中島 英子

掛軸になつたひいなへ一句添え
憲法をうらみ断絶の子を想い
酒の値も上り牧水の詩を思う
定年の進路へあらたな夢をもつ

演奏の指はピアノの上を舞う

樞原市 岩井本蔭棒

舌足らずあとは司会が引き受ける

花畑名句のままの月が出る

法厳し女囚へ囲い高すぎる

図画だけは甲で通した看板屋

日本語の説明が要る日本語

島根県 景山綾美

春の雪慕情燃したままで解け

見送りに関わりはなく発車ベル

(伯母死す)

枯た手の合掌浄土へ眼をつむり

物の化のような機関車夜の車庫

闇を裂く汽笛吹雪へ向う汽車

倉敷市 能登原白水

アルバムを開くと進軍ラッパ鳴る

老いたのし三度三度が喉に鳴る

草守るように空地の有刺線

孫とさす傘は童話の彩で降り

貧しさの意地北風を友にする

大阪市 大坂形水

ゴチャゴチャとした街に住む顔馴染み

排気ガスぐらいで大阪を出とうない

老眼鏡忘れ車を引り返す

法律に触れていないと見得を切り

自壊作用始まる 世界揺れている

大阪市 橘高薫風

青年にピストルならぬドライヤー

脚を組む女立ち去れ藤の花

裏梅へ聞えぬふりをする女

金剛山

霧這えば杉の樹間の正しさよ

恋人の時に悲しき生殖器

大阪市 不二田 一三夫

花は育ててくれた庭を忘れない

祭壇を蹴飛ばし善人ついに怒る

コブラがケタケタ笑ったところで夢がさめ

寄席

長髪で上方落語を守る気か

平和ラッパへほんまのアホが弟子志願

大阪市 木村水洞

札束へ先祖の田畑消えてゆき

利害では動かぬ意地を長屋もち

長屋にはかかわりのないドル・ショック

ささやかな庭を彩る寒椿

門真市 福島鉄児

去に腰へ帰ってもらう腰を上げ

眉つばの話へ返事洩しとく

無理やけどと無理な頼みごと

雑談の中へ本心覗かせる

岡山県 浜野奇童

着崩れて女おんなの夢を追う
産地直売埃りの中で色をつけ

ガラガラと崩れる夢に母が有り
大器晚成信ずる妻の手が荒れる

鳥取市 河村日満

水漬をふきふき片手猪口を持ち
風邪ぐすり僕には玉子酒が効き

貧乏を喰う師走の風が鳴り
日の丸の旗ちらはらとお元日

下関市 国弘半休門

反抗期筆談にして叱るまい
牛乳で育ててその子の角を矯め

東京の長男戻す田を埋める
国政にインターチェンジ欲しい頃

竹原市 山内静水

日本語さえなおその上に外国語
超勤にかかわりのない終業ベル

片ごとのケンカ言葉も男の子
我れながら地声は馬鹿になり切れず

倉敷市 小幡里風

まっすぐに吾が道をゆく足の跡
真実を話そう波が荒れている

ジグザグの列で何かを訴える
十八の晴着太陽まぶしがり

大阪市 西出一栄

駄句並べ恍惚防ぐ糧にする
セキセイのやめめへ後添い買うてやり

孫神戸女学院大ピアノ科合格
熨斗袋祝合格の文字太く

桜井市 岩本雀踊子

合格のよろこびダルマの瞳も笑い
美しくなりたい女が耐えている

着飾った旧知に声をかけそびれ
良妻は手品のように出すサイ布

愛媛県 渡辺曉童

夫婦と云うつながり残す貯金帳
利子についた利子にも似てる余生です

駅弁の情緒を食っておきましょう
とうふでもといえぬ値段のとうふの値

松江市 岡崎祥月

稼ぎすぎて芸は大根
結婚三十年に寄せて

誕生石光る指にて妻五十路
一器だけ愛し苦楽を共に生き

宝石は妻 妻愛す妻愛す
荒れ狂う風に巡視の靴いどむ

島根県 藤井明朗

暮しのバランスへ川柳の話をし
三味の音におんなの意地もひそと住む

狂っている世相へひとりこぶし振り
老妻の疲れししみ共稼ぎ

出雲市 原 独 仙

変り榮えしない顔だが鏡さん
先方も虫が好かない素振りする
稚児泣いているらし野良の乳が張り
地に落ちてなお赤失わず紅椿

神戸市 仲 どんたく

小春日に目白呼びよせ寒椿

(日航機事故)

やっこらさ冥土へ運こぶ腰をあげ
口三昧で盲の人の日向ぼこ

(K夫人逝く)

事務的に屏がしまる火葬場

奈良市 宮 口 笛 生

一日のでき事夫婦の夜を語り
出勤を見送る妻に事故の記事
年頭の抱負二月ももう終る
孝行を妻に任せる老母が病み

岡山県 大森 娛 句 楽

うっとりとさせる音色を竹が出し
金婚の旅合奏の縁結びから
焦るほど目が据らない針に糸
長い冬炬燵で伸びた爪を切り

大阪市 福井 野 迷 路

雪の朝独善居士の寒椿

通天閣賭けた命はその昔

大阪中旗消え去った建国祭

右こぶし挙げて左派とは面妖な

伊丹市 小川 静 観 堂

封切ればほのかな匂い絵便箋

握ってる手のひらやっぱり女の掌

二人三脚の妻にわかれてから一人

指みんなよごしてせせる蟹の甲

姫路市 梅 谿 庵 不 酔

それでよし女房は余所で僕をほめ

おいしい枝切ったと師匠接いで見せ

お帳場へノーションないかと二日酔

姿見をなんぼ拭いてもとれぬしわ

笠岡市 木 山 遠 二

老は淋しや床柱へはっとかれ

サボテンとわしと猫と日向ぼこ

敗けまいとして大関のみじめなり

稀少価値銭の無価値を見せつける

泉大津市 村 上 春 巳

ベトナムの平和子供の片笑くほ

公害に追われて故郷の土を踏み

お水取りそろそろ春を鹿の鼻

破れ鐘の響も春の西之京

岡山県 横 山 一 声

お手植の松とは松喰い虫知らず
牛の恋ならず人工授精され
世の中が狂い季節まで狂い
五十年木を削り木を叩き

倉敷市 藤井春日

春ならん何か刺激の欲しい夜
亡き父の偉さを偲ぶ日記帳
死ぬことも出来ぬ悲恋が人を変え
つまずきがあるので親切ありがたい

広島市 山田季賛

あて先の誤字そのままに無事届き
計画は真直ぐ立てるお正月
親父の苦労わかるとぼつぼつ口にする
子の就職へ地下足袋履くのも教え

大阪市 河井庸佑

妥協せぬその根性をこうてくれ
おだやかにきつい文句を言われてる
口うるさく言うてもくれる親があり
母の顔見えておちつく参観日

岡山市 池田古心

多趣多芸妻にすまない金使い
老いの愚痴縫って我が家の平和なる
盗まれた唇だったと云うけれど
肩書きも無く凡農も詩を愛し

堺市 藤井一二三

勝てば官軍落選だけ挙がり
水スマシ前へ進んでいるつもり
足して二で割る結論で世を渡り
奥さんによるしくの仲でものたらず

松江市 吉岡通児

真当に生きて財なく悔いもなし
経済大国そやかて俺にそっぽ向く
夫ある日他人の声音して帰り
ノームスの人ノーマル人となり

松江市 柳楽鶴丸

健康な肉体愛を受けとめる
結婚しました自然点火です
金魚の共食いにフト考える
ちっぽけな魚の目に顔ひんまげる

松江市 恒松町紅

立ちそびれてからほろ苦しい席の酒
出雲路の蕎麦に友情支えられ
手をあげてさえも不安な道渡る
過疎の村誰の拝むか道祖神

富田林市 板尾岳人

アイゼンの爪で闘志を湧き立てる
ぶつつける闘志へ山は慌てない
標高を闘志が自慢してる汗
足腰へ乗せた闘志で峰仰ぐ

西宮市 島居百酒

人なみの希いが不肖の子を揺すり
人間にしあれば酒も友も愛で
継ぎもせず継がす子もなしそれでよし
やぶ入りへ車を洗い靴を買い

富田林市

木村弥栄子

耐えるより断切る苦痛にある情性
手術台あの世をちよつと覗いて来
赤い爪嫁の毒氣にあてられる
三角の底で女は行詰り

大阪市

江城修史

想われている幸福に過去を切る
生きのびた命再起の灯をともし
前向きに生きる瞳は企らまず
虚飾なき妻の瞳はいつも澄み

島根県

堀江正朗

想い出をたぐる昔のままの味
嫁がせた娘の名をそつと涙拭く
愚痴ぼつりぼつり呼吸に合やす妻
疑うこと知らずに生きて迷うとき

倉敷市

谷井扇水

麦踏みをして青春の日を恥じぬ
脇役が欠けて主役が宙に浮き
古里の感触はないアスファルト
明けまして芽出たかったは二十頃

大阪市

河股緑水

Uターンした故里は遠い道
二回目はよく出来ましたが挨拶
今日のこと今日に済まして今日を生く
花もまた蝶にへつらう身のこなし

八尾市

飯田悦郎

闇の眼で音を聞いている油虫
水すまし水輪にあった平和な日
髪を梳く豊かな重みの幼な妻
目を覚まし母を眺めてまた眠る

兵庫県

河原みのる

国民よこらでホンマに怒らんか
天皇の額下ろしたがどないしよう
石塔の信女の赤が禿げかかり

ひ孫誕生

ダイヤの瞳喜怒哀楽の翳りなし

尼崎市

高津徹也

青柳へ無念の心捨てに来る
薫風へあくまで高き杉の天
三角の植田も楽しきせるとる
整然とあり庭中央の松の枝

松原市

玉置重人

棺桶が黙ってる華麗なる葬儀
シクラメン春待つ顔の赤い色
歯車の一コマとなる午前九時
社長ふとヒラになりたいなと思ひ

鳥取県 清水一保

大山の近くに住んで遠い縁
餅つきに感動が有り娘の門出
無抵抗の抵抗豆腐の値が上がり
家族みな寝て妙案が芽を開き

西宮市 藤村 女

恍惚の人読んでおきやと子がくれる
葉牡丹の床に座れば春めいて
余りいい月夜私を歩かせる
七彩の詩あり我が家の平和の灯

大阪市 室谷徹舟

日の丸を立てて子供ランチ来る
凍て土を踏むお百度へ靈氣満つ
べっぴんの婦警違反へ容赦せず
観光地ただのスタンブ薄すぎる

大阪市 中川滋雀

縄だけでない暖冬のありがたし
祈ること多く拍手さえしめり
つまずいた歩巾へ欲が捨て切れず
裏話めでたい席の酒肴

堺市 高橋千万子

手放した株の高値を見るめがね
口実の風邪がほんとの熱を出し
生涯をしばるダイヤを軽くうけ
人間解放離婚して来た顔でなし

岡山県 出原敬一

孤児おもう和尚焚火へ遠く居る
思い出の地も特急は容赦せず
髪染める姑で財布をゆずらない
あきらめた接木こっそり春を告げ

島根県 小砂白汀

深海魚おめおめ吸物碗の中
愛の鞭なればずしりと身にこたえ
歯にころも被せねば人につき刺さり
老いたりなめをはずした矢を放つ

大阪市 西川誓二

生きて行く糧恩給にすがりつき
悔いのない老後へ倦ずにネジを巻く
黒字幅うまく縮めて試算表
風邪ぐらいで老骨のガタを知る

岡山市 川端柳子

美化されて次代につづる居士大師
八方を丸くおさめる涙拭く
しあわせの頂点目指している歩巾
一つ宛鎖解きたい日の吐息

枚方市 宮川珠笑

酔っているのに文鳥乗りに来る
混んできて立飲み半身で譲りあい
売り食いの過去を土蔵に秘めて朽ち
ランドセルほうり出される日に慣れ

愛媛県 村上旭童

親馬鹿を又くすぐりにきた便り
いささは子の荷にもなり一人住む
酒だけが強い男となり果てる
女には女の予定五時がくる

大阪府 飛田好一

やさしゆうて強うて丑年僕の妻
酒飲まぬ客で愛想のない仲居
氷雨降る道小ぜわしく小刻みに
恍惚の境地にあって酒と座し

大阪府 河野君子

ツーカーの仲にさせてる電話口
一人相撲している影は隙だらけ
姑に好かれて因果な女やと夫

息子就職上京す

子の一步へ期待と不安をしまい込む

東大阪府 竹中綾女

老後の話すテレビの身に泌みる
ブーメランそんな夫にあきたらず
寒風に四季咲きバラの堪えて咲き
田高の恐慌庶民にぴんと来ず

富田林市 浅川八郎

老い給う院長のメス先ふるえ
手術台命をお任せしたもの
手術中局部麻睡に持つ不安

リングルに任しておこう後のこと

大田市 藤田軒太楼

大豆不作三日の鬼に居坐られ
冬眠の虫が寝ぼけた暖かさ
カレンダールの標しに待ち託ぶ拳式の日
焦点をぼかし逃げの手考える

倉吉市 渡辺菩句

母と同じ胃袋同じくすり飲む
好きだから胸は火を喰く山であり
海いいなア青い酸素をうんと吸う
ラーメンを食べてる母子夜の楽屋

鳥取県 森田布堂

公害と事故に悩んでいる平和
病名を聞いて見舞に行きそびれ
味噌汁に値上げの豆腐泳がせる
お姑と対話暮しの知恵も生み

大東市 土岐トク子

御時世と達観ビル建てる僧の知恵
求め合い語り合う友あり春の海
子沢山経験踏まえ説く避妊
空しさをかこう電話のけたたまし

東大阪府 齊藤三十四

天眼鏡女難の相とはうれし
余生など云うとれず亦吊皮にいどむ
石仏の肩へ粉雪飛鳥道

天守閣より高いビルが建ち

富田林市 和田維久子

奥志摩の旅（三句）

真珠はぐくむ海に魅せられ志摩の旅

英虞湾のしずか燈台白く光り

長過ぎる丹前氣にする島の宿

再会を拒み続けるきず痛む

堺市 伏見茂美

燃えつきて見れば女は一人旅

息づまる誤解のままで寝る枕

灰皿は自問自答の決を聞き

柳友を思う

なくさめの言葉を探がす句座にいる

鳥取県 谷無閑

老妻も時には気もちよく飲ませ

暖冬もポスターだけは雪が降り

酔ざめの水に浮気の余韻あり

結論を白紙にもどし酒となり

鳥根県 大森孝華

舞いあがる風へ郷愁匂うてき

七色の詩へ残り火なお引かれ

雪どけの谷間へ匂う梅の白

道連れの傘一回にある思案

八尾市 大路美幸

わびしさを飲むとは見えぬ高笑い
酔うている女肩から崩れかけ

雪しんしん嫁がせた夜の濁り酒

停年の盃満す妻の酌

名古屋市 吉田水車

白衣の天使裾も段々せり上り

ねんねこの下は颯爽パンタロン

暖冬異変花は何んにも知らず咲き

倉敷市 臼井三林坊

温室に咲く花主義を持っていず

春日を子犬動かす病んでいず

凡人の昨日に続く今日で無事

松江市 中川晃男

新薬にすがって文明に生き延びる

口を開けば文句になる世相

個性を削ってご円満と呼ばれ

八尾市 古川鶴声

財閥が左り団扇になる政治

列島改造日本を切り売りするつもり

ニクソンの手帳に沖縄貸しと有り

笠岡市 松本忠三

明暗を分け一服の煙り舞い

新婚の足を奪ったストライキ
物価高犬の食事にまで響き

倉敷市 竹内翁童

強がってみても未練が肩にゆれ

たばこの輪、朝の体調聞いてみる

民宿の設備投資が雪を待ち

姫路市 大江秋月

夜道まだ一人で恐い妻の年

斗争の貨車もおんなじ音で過ぎ

新しい方が混んでる喫茶店

小松市 馬場魚山

にんじんの個性好かれぬ甘さ持ち

二本生へ揃い何でも口へ入れ

白鳥のエ付物好きだと書かず

呉市 植田英詩

ころころころ父についてく母であり

プロポーズ遂にやったという背伸び

雪積る夜を街からの花便り

岸和田市 葛城伊三郎

貯めるだけ貯めて後顧に憂い持ち

足音に熱さ吞み込むつまみ喰い

空即是色血に温みある限り

大阪市 今西章雅

大豆暴騰議会でも揉む節分会
情報整理新聞見出しだけを読み

生まと違う味の不思議さするめ噛む

羽曳野市 塩満敏

中の島芽ぶく柳を見る二人

図書館の屋根で一服鳩の群

地下街にうなぎの香り吹いてくる

諫早市 原田明春

酩酊がとぼけた今朝の留置場

ウーマンリブこれが女の道ならば

あらぬとこ探って医者の好奇心

大阪市 神田秀峰

初恋に燃えた思い出倦怠期

ギャンブルもお頼みしてる初詣

核家族育児の本と首っ引き

岸和田市 雪本珠子

太陽をハントしている若い肌

再婚にふみきる女の虚栄心

捨て切れぬ想いを秘めたペンダント

岸和田市 林裕子

ナツメロのチャネルだけは子にやれず

芽ばえる娘受話機取る手でドアをしめ

勝った国なくてベトナム戦火きえ

加賀市 細呂木魯木

鐘樓に未だ戦時がある寺列び
ひやかしの無ぼうへ妻は袖を引く

★

川村好郎

想い遙か恍惚として蟹させる
ガソリンのつもり出掛けのパンビタミン
五次防もする気孫のプラモデル

大萬川柳大会

倅せな梅里と思う日の涙
云いたきを云えしは君よ墓ゆる

西尾 栞

この期に及んで人夢だ にんにくだ
たちいった話ですがと性のこと
読書欄これから活字小さくなり
イメージのトンネル出たが雪がなし
たどたどしい日本語の詐欺にあい

菊沢小松園

出世とは関りもなし家系の譜
人形の智恵は人形だけが知り
ストリップお前はもとへ帰れぬ身
愛想ないけど嘘はない販売機
心中した部屋が伝説めいて来る

若本多久志

二月九日交通事故被害

救急車今日はこの身が乗せられる
人間はこうして死んでゆくものか
枕元遠くの方で医者之声
助かると聞かされてからお念仏
孫のような加害者の顔いじらしい

北川春果

高等看護学院面接試験(四句)

生き甲斐をしやべり面接試験すみ
新聞はテレビ番組だけを読み
趣味読書聞けば漱石しか知らず
お母さんとうっかりいうていいなおし
次男結婚披露宴
嬉しさの酒が呂律へ廻って来

同人各位へお願い

これから一年間、皆様の作品を選ばせていただくことになりました。及ばずながら懸命に取り組んでゆきますため、是非左記の点につきご協力お願い申しあげます。

- 一、締切日を必ず守って下さい(延着は来月廻しになります)
- 二、用紙は当社句箋又は同寸法の用紙をご使用下さい。
- 三、くずし文字は、間違つて解読され易いので楷書でお願いします。

気持ちよく仕事をさせて頂きますよう重ねてお願い致します。

(多久志)

川傍柳 初篇研究

(百十七)

前田喜代人 川端柳風
故
岡崎重義 高須啞三味
清博美丸 十府
藤井和雄 岡田甫

690 これでも物に成ふかとほろを出し

一甫

藤井「ほろ」は雨・風を防ぐため車などをおおう幌。物に成るは役に立つ。こんな物でも雨具の役にたつだろうかと幌を出した。俄雨にはこもやむしろをかぶってかけ出した昔だから、幌なら結構雨具として借りる人も喜んだらう。ほろと訓じればまた意味は別になるが、そのまま「ほろ」は幌として解した。

川端「同じように解しています。或いは古着屋へ持ちこんだものか。

竹馬の馬前にかかる古織

質草の流れを竹の馬は食

から考えると古い母衣を出したとも思える高須「なんともいえぬが、柳雨本では「ぼろ」と濁点を打っている。そして三面子先生は「質草」と解している。「ものになら

うか」だから、どうもその方がいいようだ。俄雨に貸すのなら「役に立とうか」ぐらいのところだろう。

岡崎「やはり「質草」だろう。質草としてひきとってくれるかどうか、自分でもわからない。ひどいボロ切れである。

前田「ほろ」はやはり「ぼろ」であろう、質草よりも、何か必要あって、さっぱりした着物がほしい。それで、ぼろを出して「これで物にして下さい」と縫いかえを頼んでいる。質草にしても、貧乏人の生活一風景。

丸「前田説前半のように、再製して着られるものにならうかと、ひとりごとをいいながら「ぼろ」を出している女房。

岡田「同。

691 藤井「又々ここでもぼろを出してしまった。妓女が出た跡で障子を張かへる

甫 弓

藤井「妓王・妓女は京都堀川の白拍子で、母子三人ともに清盛の館に召され殊遇をうけたが、加賀の白拍子仏御前に寵がうつり「萌え出づるも枯るるも同じ野辺の華いづれか秋にあはで果つべき」と障子に書いて嵯峨にかくれ、母子三人尼となった。後日仏御前も嵯峨で後を追って、ともに仏門に帰依したという。

入道の前へ障子をもって来る 傍二六

清盛がもってきた障子を見て、張りかえろと命じたらうという想像の句。

高須「賛。清盛が張りかえを命じたときまで考えず、家人が「こんなラクガキをして行つて」と張りかえにかかったぐらいでよくはないか。

丸・岡田「賛。

692 おっと手をふいてみなよとみッ物や

五 扇

藤井「みつ物屋」は古着屋。「みなよ」は「見なよ」。お手に取って品定めもいいが、これは古着でもこちとらの売物だ。まづ手を拭いてからにしてくれと云うところ。三つ物屋の三つ物とは、古着の引解（ひとき）のことで、表・裏・中綿と三つに分けて売ることによる。多く粗悪品で下女など下層の庶民相手で、洗うと色がはげたり、一度で駄目になるような品を売つたらしい。

三つ物を下女は値ばかり聞いて見る

四・4

三つ物屋下女ハおっぱだぬげといひ

二・14

高須「三つ物」とは「櫛・笄・釵」をいう。と三面子先生は書いてある。亀甲はシミがつきやすいので、よく「手を拭いてから見てくれ」と、三つ物屋が言っているのだ、女性を主な顧客としているため、そういう物を持って歩いたのではないかと思う。行商が主であったから。

岡崎「礎稿賛」。「手を拭いて見なよ」と注意しているのは、飛び出て来た下女が濡れ手のまま、古着の品定めをしようとしているからである。

前田「同」。「おっと」は要を得ている。

清「三つ物」の語源については知らないが、浮世風呂などを見ても、古着や綿布を売り歩く行商人で、亀甲などは持ち歩いている。亀甲など持ち歩くほど品のいい商人ではない。

丸「賛」。

岡田「賛」古着屋です。

693 丸漬を黄色なきれてふいている

眠 狐

藤井「そのまま解してわかったようなつまらぬ句。黄色なきれに何か意味があるのか。乞う御教示。ただ汚れて雑巾のようなきたないきれでふいているだけのことか。川端「田舎のせなあ」だろう。汚れた布で時には汗も拭く。

高須「黄色のきれ」とは「鬱金の布、すなわち布巾のこと。「丸漬」とは「抹茶の裏か」と三面子先生はいうが、「ナツメをウコンのフキン」で拭いている情景なら、点茶の後始末が何かで、静かななごやかな景であるが…。

前田「拭いているのは下女。「丸漬」はたぐわん漬の丸のもの。出来上った丸漬のたぐわんをふいているので、その布は黄色くなっている。

清「漬物の黄色と布の黄色、それだけの句と思う。

丸「丸漬は全漬瓜（まるづけうり）の事。まくわ瓜に似て大きく、初め緑色、熟すと黄色、煮て食うに適せず漬物とする。京ではあおり、大阪ではうり、江戸ではまるづけという。丸漬瓜の黄と、ふきんの黄とのとりあわせだけではあるまいか。

岡田「丸漬瓜を黄色い布で拭いているだけでは、どうも柳味が乏しい。といって三面子博士の茶道具のナツメ説も、ナツメを「丸漬」といった確実な文献を調べてからでないと、すぐ賛同はできかねる。後考。

岡田 甫 著

川柳東海道

上巻・750円
下巻・850円

上・日本橋から大井川まで

付・鎌倉・伊豆史跡めぐり

下・大井川から京都まで

付・尾張・美濃の史跡・伊勢路・琵琶湖めぐり

待望の下巻絶賛発売！

江戸の庶民詩人川柳／片手に、東海道五十三次の長丁場を足で描いた「道中記」——弥次喜多時代の東海道、その時代の旅人の姿を髣髴させる異色作！

読 売 新 聞 社

東野大八

サイゴン1月28日午前8時

サイゴン1月28日午前8時―停戦は発効した。街中のそこから一斉にサイレンが鳴り渡り、同時に黄地に赤三本のベトナム旗が至るところに林立した。「停戦は平和を意味しない」チュ―大統領のこの放送を裏づけるように、停戦以後も、いんいんたる砲声と、けたたましい銃撃の音が響いていた。

惨鼻を極めたこのベトナム戦争は、二十年の長きにわたり、有史以来の戦史に、汚辱の記録をそこに描き出した。米軍は広島原爆の三百八十五発分の七百七十万トンの爆弾と、枯葉材などの怖るべき殺人新兵器も駆使して寸土も余さじとばらまく、皆殺し作戦に出た。最盛事の派兵は五十五万人を数え、B52等の航空機は一万機以上、ハイフォン沖合には第七艦隊が空母をまじえて二百隻以上もたむろした。

フランスにつぐ米軍のこのベトナムへの侵略介入は、ベトナム人同志の眼をおおむね憎悪

殺りくへとおいやり、同じ民族が血で血を洗う地獄絵図を描き出した。その神々も面をそむける犠牲によって、ベトナム人はその手に最後の勝利をかちとったのである。巨象に蟻が勝ち、ナバーム弾に竹槍が勝ったのだ。瓦レキの廢墟の街になりわたる停戦のサイレン。われわれは二十八年前のあの敗戦の酷暑にたたずんだ玉音放送の瞬間に還らざるを得ないのである。ああ、ベトナムの戦争は熄んだ。

中国の侵略者の奴隸として千年あえぎ
フランスの侵略の支配の下に百年苦しむ
いつまでも二十年のあいだ内戦は続いた
母が子どもに残す宝は、悲しみばかり
母が子どもに残す宝は――

中国の侵略者の奴隸として千年あえぎ
フランスの侵略の支配の下に百年苦しむ

いつまでも二十年のあいだ内戦は続いた
母に残された宝は、水も枯れた畑
荒れはて燃えつきた森――

サイゴンで砲火殺りくの底を流れていった
これが民衆のうたであつたのである。

停戦のサイレンが木魂する空は青かった。

そこに陽がかがやき、漂う雲は眩しかった。

だが、妻や子や、父や妹の同胞は二度とは還

えられない。生気みなぎる天に、なんと荒涼た

る地上のその虚しさ。そんな民族作詞家ト

・フーのメロディが流れてもくる。

私もそうした痛ましいベトナムの人々に対

しここに弔花の言葉をつづりたい。かつてこ

とある毎に、日記に、手帳に、ノートに端々

にメモしていったそのベトナムの戦禍の、そ

れは川柳にことよせた、その日、そのときの

私のベトナムを悼むうただったのである。

B52 黒く冷たく重くとぶ

北爆のあとに爛れた月一つ

北爆の捕虜が戦く竹の槍

地軸裂く北爆猛る陽も砕く

北爆の業火は赤く地を奔る

米捕虜の哀れは洗足檻樓に雨

こと切れて米鬼を怒る眼の光り

爆風に裂けた土囊に草もなし

こめかみに銃押しつけて獣鬼奢る
しぶく血も機銃冷たくにぎりかえ
米兵もたじろぐ若き一途な眼

ヘル乱舞 狂気相呼ぶ地獄絵図
舞上るヘルに滴る腕一つ

戦場は燃ゆ 草も木もヘル乱舞
その顔も 蛆を這わせてヘルを待つ
ようしやなく血しぶく貌にヘルの風

春の草安堵のこもる死者の顔
とりすがる母へその子もこと切れて

チンボコの稚きままも蠟たけて

監視哨狂った女 今日もさまざま
流弾の風へニタニタ狂女坐す

鉄帽へいまいましくもワラの笠
首一つ笑ったままで水に揺れ

落橋も錆び墓も朽ちメコン河

ニクソンの標的どれもささくれて

星条旗五万の死者へ垂れ下る

戦場のミサ落日の風凍る

経文とミサへだてても死は同じ

鉄帽と銃の墓標も朽ちて春

恋人はいま地の底へ下る棺

号泣と嗚咽へ黒い死者の髪

民族の神話へ死者はただ黙す

葉莖の丘も爛れてユエは陥つ

ジャングルの闇黒蟻の列続く

ジャングルの闇声もなく人は死す
こと切れていくのか腕が重くなる

星条旗哀れ血に染み泥に伏す

ジャングルの骨黒々と死者いぶる

十字架のきらめき秘めた死者運ぶ

今日の日は遺品の美女が燃えていく

泣く子等へ母の温味が消えていく

焼死体 彫塑のごとく天を衝く

刑場の柱の下は 鬼が棲み

夢と死にキラめく星よ解放旗

ジャングルも荒涼として昼の月

雨期来る 水漬く屍そこここに

揺れ動く ソンミの村のその鬼火

キャタベラのトゲが身を刺す廢墟の火

狂気とは腐肉の山へも弾を射つ

グエンザツプただ掘りつづく土と泥

死者と棲む 地底の奥のハノイの灯

米機曳く力 地蟻の群に似る

竹槍もバカにはできぬ世と教え

テト近し 砲火の中の花でこそ

グエンホー死なず今こそ陽は昇る

Vの字の指が虚しい二十年

眼にしみる瓦礫の山の小さい旗
花だけが 戦禍の土にこだわらず

クアンチの瓦礫の山の花は旗

停戦という爆竹の音の味

地の底の死臭もこめて春は来ぬ

象と蟻 寓話は生命あるごとし

人海が物量戦に今ぞ勝つ

ヒトラーにされてニクソン敗れたり

ニクソンは原爆というところまで

キッシンジャー ハノイの花の風がしむ

アオザイの色鮮やかにテト近し

テト来る 微笑は花と陽を愛す

アオザイのコーラス勝利の声こめて

アオザイの裾ひるがえす娘の誇り

春ひさぐミニ アオザイを振りかえる

北爆の悪魔浄めてあげ花火

停戦の花火 歓呼の眼にしみる

米機ではないぞ歓喜のスターマイン

鎮魂の涙みどりの丘にこそ

ベトナムの痛み隻手の骨にこそ

路郎川柳以後のわれら

(A)

谷垣史好

(B)

香 川 醉 々

(C)

有信新之助

若手の小柳集人に云いたいことを云わせてやろうという編集部のはからいで、三年ほど前に酔々、鬼遊、僕の三人で鼎談をやったことがあった。その記事は四十五年十月号の川柳塔誌上に「苦言あれこれ」というタイトルで掲載されたが、雑誌が出来る早速、清水白柳

A

★よくたずねられることに「川柳塔の句風は麻生路郎先生の旗の下に」と云われているが、路郎先生を知らぬ（旧川柳雑誌）わたしたちには何か神話のような気がする。
「キミの川柳は何派？」としかれるとわたしたちは返事ができない」そうだ。
★ぼくの入門当時も路郎先生に、おなじようなことをうかがったことがある。
「川柳雑誌の句風は？」
「人生派」とでも云うかね」
「政党でいえば社会党ですか」
「自民党でもないが共産党でもないかな」
このような問答をかわしたことがあった。
★これだけではあなたちの答えにはなっていないかも知れないが、アウトラインだけはつかんでもらえただろうか。（以上は諸先生をさしおいてのぼく個人の見解である。不二田一三夫）

さんからお叱りのハガキをいただいた。「みんな遠慮してものを言ってるのが判って感心しません。もっと突込んでくれると思っていたのに案外でした。……」

三人とも遠慮なんかしなかったつもりだが、意余って力足らずといおうか、活字になったのを見ると、生ぬるい感じは否めなかった。それから僅か一月後、白柳さんは亡くなられた。この一枚のハガキは、まるで白柳さんへの遺言でもあるかのごとく、いつまでも忘れ難いものとなった。

川柳塔誌の特色の一つは、そこに議論、論争がないことだと思ふ。発止とタマを投げる、それをがっしりと受けとめ、全力で相手に投げ返す、そのようなやりとりによって生れる緊張感というものが、この雑誌にはない。よくいえば和気あいあい、悪くいえばマアマアのなれ合い気分である。

この頃、川柳塔の句が面白なくなつたといわれるが、たしかにそのとおりで、最初の二、三頁で僕なんかはイライラしてきて、先を読み進む元気がなくなってしまう。そんなとき、古い「雑誌」を読み返してみると、あたかも川柳のふるさとに帰つたような気持ちになり、ほつと安堵するのである。

同じ路郎川柳でありながら、この相違は、どこからくるのだろうか。路郎川柳の本質とは一体何だろうか。

「一分間の柳論」(二月号)にも書いたとおり、僕は「人間陶冶」という言葉にずっと疑問を持ちつづけ、未だにその意味がシカと

納得できないでいる。疑問を解こうと思っても、句集「旅人」と「川柳とは何か」「新川柳鑑賞」などの路郎師の名著は、今日もはや入手不可能であり、せめて川柳塔誌上で、その手がかりでも提供してもらえればと思うのだが、僕の不勉強のせいか、あまりお目にかかったことがない。単に想い出話か、断片的な句の紹介があるだけで、本格的な路郎研究というべきものは、その萌芽すらないのであるまいか。

これは「川維」の継承誌と自他ともに許しことあるごとに路郎、路郎と叫びつづけて、もう来年は十周年を迎えようという川柳塔としては、実に怠慢といわざるをえない。それとも、「人間陶冶」は、容易に触れることを許さぬ聖域とでもいうのであろうか。

ここで、教祖・路郎ではなく、川柳作家路郎に対する真剣な肉薄を試みてほしいと思う。そうでないと、路郎以後のわれわれは永久に路郎川柳との距離を縮めることはできないであろう。

B

昭和三十二年頃、月刊雑誌「国文学(?)」だったかに、川柳の特集をしたことがある。私の手許にはないが、一度読んだことがあろう。その中に、各柳社の主義主張が書かれて

いたように記憶する。

路郎先生の声咳に接したことのない私は、論文を通してか、または先輩各位の話でしか先生の川柳観を知ることはできない。さて編集部から上記の題を課せられたので、あらためて手許の先生の著書・句集を読みなおしてみた。三十年に発行された「川柳とは何か」の序文に次のようにある。

◇私は川柳を人間陶冶の詩であるといっている。人間へ締め木をあてて絞ると、いろんな悪汁が流れ出て、そのあとには朗らかな脱俗した人間が残るのではないかと思う。その締め木役を川柳が果たしてくれているように思えてならない。句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸であるからである。人間は生れながらにして、腕くようにできている。しかし、いくらか腕いても、どうにもならないことに気づかないようである。しかし私は川柳することによって体内の悪汁を排出することに成功している。だから私にとって川柳することは単なる趣味ではなくて、人生をいかに生きるかということを知するためである。拙句の寝転べば畳一じょうふさぐのみと云うのが川柳によって得た私の人生観なのである。更に私は

人類は悲しからずや左派と右派と云う句を詠んでいる。これが私の世界観である。

これで見ると先生の川柳観・人生観がおぼろげには分かる。しかし何分短い文章だから

これで十分理解できるとは言えまい、この点は、先生と接してこられた先輩諸兄であれば、つきり理解できよう。

「一分間の柳論」の中で、谷垣史好氏が「川柳は人間陶冶の詩である」などと大上段にふりかぶられると当惑してしまうのだと書かれたのも、最なことと思う。また心情的には、川柳は「遊び」としかいいようがないと述べたのも、またむべなることである。

もちろん「遊び」という意味が問題なのではなく、なニヤンスを持っている。川柳をつくる行動、たとえば句会・吟行など確かに遊びという行動が伴っている。しかし製作された作品は「遊び」だろうか。「遊び」を伴う行動の



ATLAS

プロラス

高級洋菓子・レストラン

本店 洋菓子部 TEL (33) 9974
レストラン TEL (21) 2334

結果としての作品は決して「遊び」ではあるまい。そんなものなら、句集を買って読むことなど時間の浪費に過ぎない。確かに作品自体が実生活に役立つことはない。しかし川柳が、一つの人間文化史を形づくっていることが無駄なことだろう。

句集「旅人」を読めば、偉大な一人の作家魂に触れることができる。これは「旅人」に限ったことではない。句集（作品）を通じて人間とじかに触れ合うことができるのは、私にとってはすばらしいことなのである。

かつて、私は川柳の知よりも情を追求したいと言った。これは何も川柳の知をゆるがせにせよと言うのではない。私なりの追求の仕方と言っているのである。今後ともできるだけ叙情詩的な作品をつくりたいと考えている。

現代俳句が芭蕉のさび・わびの世界の追求と異なるのと同様に、現代川柳は、柳樽の世界とは根本的に異なるのである。

伝統というものが、厳格にそして力強く生きつづけているとすれば、その流れのなかに在る者は勿論、それに触れる周辺の者にさえも、大きな影響を与え、同化してやまないものだと思う。

C

職業川柳人を宣言して、苛酷なまでにきびしく「人間陶冶の詩」を追求して、偉大な川柳道を打ち樹てた麻生路郎！これが先生没後に参加して、顔を見たことのない、声すらも聞いたことのない、柳歴の浅いわれらの脳裏に、数年を経て次第に焼きつけられてきたイメージであった。

やがてくるであろう最初の大きな壁に、いつ突きあたるかとか戦きながら、模索の毎日をくりかえしている自分の作品をふりかえってみて、そこから偉大であるべきはずの、麻生路郎の伝統を見出されるか？と自問したとき、確たる答えのかえってこないのが、現在の私の実情である。

なぜそうなのか？と時折り考えてみるのだが、路郎先生没後に同人制を敷いて再発足したときに、それまで太いパイプで流れていた伝統が拡散してしまっただけで、結果的に稀薄なものになってしまったからではないか？と思うときがある。

現在の川柳塔の太らかな抱擁力は、まだ柳歴が浅く、自己確立のできていないいわれわれにとって、まことに肌触りのよいものではあるが、ときとして微音湯のなかで、ぼちゃぼちゃ甘やかされているのではないか？という危機感にも似た心許なさを感じずにはいられないのである。

事あるごとに、路郎につづけ！人間陶冶の詩を詠え！とは聞かされても、そのためにはどうあるべきなのか？という、ふだんの指導が充分つくされてはいない憾みがある。

食満南北十七回忌川柳の会

▼四月二十九日午後一時。会場 南宗寺内第三幼稚園。題 花形・唄う・幕・筆・原稿。堺市川柳作家協会主催。

▼若本多志著

「凡愚のたわごと」

送 価 六〇〇円
一〇〇円

偉大であった麻生路郎の息のかかった諸先輩よりも、数量的にわれらの世代が上まわりつつある現在、このままでは伝統がますます稀薄になって、特色のないのが特色といわれそう、雑然とした集団にすぎなくなる恐れがあるように思えてならない。

明治中興期以後、対立したまま安定を保ってきた川柳界に再び新旧論争が台頭し、日毎に白熱化しつつある現在、その最先端に立たされているわれら世代が、急テンポな時代の推移に、変革を余儀なくされるであろうところから川柳に、その拠りどころとなる伝統の確立が急がれるゆえンである。

われわれもただ漫然と先輩の指導を待つばかりでなく、われわれの手で拡散した伝統の糸を手ぐりよせて、太くで強固な一本の綱に縋りあげて、その伝統の上にしっかりと足を踏んまえたうえで、あくまでも自己を見失うことなく、これからの変革に対応してゆく、その自覚と主体性のなから、麻生路郎が提唱する伝統の「人間陶冶の詩」が生れてくるものと信じてやまない。

追憶

麻生葭乃

梅の寒さも通り過ぎて、桜の満開を見送ったら、次は菜の花と紫雲英（げんげ）の世界となる。今の子供は菜の花は知らないだろう。知っているとしても花屋の店先で黄色い花の何本かを見た位で、広い菜畑とあかい紫雲英（げんげ）畑が入り交って、麦畑を追かけてゆく汽車の窓からの壮観は知らないだろう。

今から七十年程昔、私が十歳位の頃は大阪も今のような大都市でなく、東西南北の四区だけで、電車は漸く九条通りあたりから築港

「旅人」以後の

麻生路郎作品

三十六年七月号

不朽洞句帖

一行詩あぐらをかいて見せるなり
台どこへ主婦を残して夕涼み

— 23 —

へ向って走っていただけであった。私の記憶だから当てにはならないが、約半世紀以上も前のことだと思つて貰いたい。その頃長堀川にかかつている橋の上へ立って東を眺めると、高層なビルなどなく、瓦屋根の家が遙かに遠くまで続いていて、その向うにはなだらかな山の姿が霞んで見えた。菜畑とげんげ菜への思慕の念がこの時私の心をたまらなく掻き立てるのだった。この風景が

「菜の花はあの屋根のはて屋根のはて」

の句が生れる動機となつたのである。作つたのは何年もあとのことであるが、今は亡き高橋かほるさんは船場育ちであつたが、この句が好きだつた。いつか北川春果さんが川柳塔へ、今にわからなくなるであろう句の中へこの句を例に引いていられたが、実際さうだ

と思う。現代作家の孫や曾孫の代になったら「川柳雑誌」へ掲載した武玉川研究や川柳初篇研究のようにお歴々が集つて、ああでもない、こうでもないと言わねばならぬ事になるだろう。

世の中の出来事は猫の眼のように変わつていつて忘れられて終うのだ。人気を呼んだ流行語もいつかは死語となつて行くではないか。一番早く難解の句となるのは時事吟であろう。豆秋さんの

「大毎もとまり豆腐屋もとまり」

の句は当時は刺戟の強い句であつたが、今はそれ程でもないと言ふのは時事吟としての運命を持つてゐるからである。今のうちに難句になりそうな句へ註釈をつけて置くような篤志家はいないものかとつくづく思うのである

奥さんも負けずに飲んで涼んで来

豚まんの土産BGさんと知れ

日本銀行ドアを押してる人を見ず

デパートでスローの母が眼立つなり

草野球母呼びに来てピッチャー去ぬ

大阪通信病院川柳会「なやみ」

なやみ多し金拾うてもなやむなり

南海電鉄川柳会「ダンブカー」

ダンブカー暴走明日を思わざる

(馬) 静 島 (傍)

水煙抄

北川春巢選

東京都 山根白星

背の君と妻に詠まれて撫然たり

空耳の読経に寒い背のあたり

鉢の木に似たヒユッテの火の温み

ピンが落ちてゐる女の部屋に居る

手に職を持って女の洋酒党

資本家の面罵に耐えていたこぶし

岡山県 嘉数千代香

口下手な息子にジーンと来る温み

家計ピンチせめてやさしい語を探がす

つまずいたところから人生観を変え

叱られる予感白足袋白くはく

春や春猫もきれいに顔洗う

入学の今日から祖母も一年生

島根県 安達潮音

二人旅まだ果さずにいて六十路

恍惚の人を羨む苦が多く

限界は言わぬが花をききたがり

磯鳥賊の大漁レジャーを通り越し

尼氏の句碑除幕近し

あの岬まわれば句碑がよぶ夕日

島根県 堀江芳子

飲み仲間なんでもだしにして集い

いじらしい言葉で去ぬる初泊り

ふつつかな娘でと言いたくないけれど

ひとりっ娘抱くよう万年青実をつけて

嫁がせてぼつり日暮れの台所

竹原市 三宅不朽

土葬する鎌音私の胸を掘る

ああ美味い店主それから話し掛け

素直な娘をしきりと感心するも年

好きな物言えへ父ちゃん値が張るよ

なあ豆腐お前も妻の愚痴の種

今治市 渡辺南奉

よく眠る妻よ日本は平和なり

影法師だけが裏切らない味方

最低の暮しの貌へ化粧する

泣くまいぞ夫婦の城が湿るから
本当の事を言うたら敵が殖え

大阪市 柳 原 静 香

車椅子の男たくましき腕を持ち

句帳閉ず心の乱れが移りそで

娘の縁談胸ときめきて寝つかれず

三女婚約

空想のカンバスに娘の晴れ姿

産もうかと思案した娘が嫁にゆく

東京都 宮 崎 美 津 子

お花屋と八百屋に菜の花別れ咲く

あした逢う約束それから長電話

片言が背中中にぎる主導権

再出発下弦の月はさりげなく

ある保母さん

バイバイをしてからはママよそのママ

大阪市 小 谷 葉 子

細雪心のかよう人に降り

明日があるから木枯しに身をまかし

白菊の白さに未来図を変える

駈けてみる一人の巾の道となる

いま一度女にかえる紅をさし

守口市 野 呂 杜 月

天地人知らず野性の花伸びる

吸い溜めをしたい空気の中に立ち

経験と言う名の損がつづく賭け

せまき門開くか入試の祈禱料

大東市 土 井 浩 輔

借着して最前列で撮される

親戚親友総動員の家を買ひ

ヒシ曲げて折りたいノッポのビルが建つ

黒棒で天寿を完うしたという知らせ

大和郡山市 森 田 カズエ

ステレオをかけて炊事場リズムカル

吾がくらし三文判で用が足り

スキヤキの匂い張込み唾をのみ

看護婦に小児科の顔外科の顔

和歌山市 垂 井 千 寿 子

今日だけは素直に動く大晦日

いい噂七十五日待たず消え

背なの子と指折って待つ春の音

バレンタインデー幼ない愛が息子にも

今治市 大 本 バ ッ ト

ジープを野良着にしてる耕耘機

漫画見る暇有り九九は覚えな

風紋と思えば楽し妻の皺

価値観を変えると要らぬ物ばかり

今治市 渡 辺 伊 津 志

身内から騙す商法図に当り

はじらいの美しさ知る俄か雨
寒月のきれいさに似ず心揺れ

和歌山市

秋月宏方

俳人にどこか似ている梅の花

夫婦喧嘩もとをただせば物価高
日曜も働いたとてたかが知れ

大阪市

上十止庵

知に情をからませ人間らしく酔い

世辞の極み女が女をほめる

生きてゆく嘘さえ許さない若さ

氷見市

美子

悲しみを集めて夜の洗濯機

無心にはなれず毛糸がもつれ出し

均年令六十みりん干し工場

尼崎市

中谷利美

反省はしても後悔しない主義

応接間ずらり無くてもがなの本

信念が然し社長と食い下り

大阪市

堀口欣一

これもまた親の譲りの長嗣

梅見ああ鶯笛の五百円

ベテランの八百長質問まだ続き

和歌山市

慇村ふみよ

心だけ触れて指さえ触れず去り

飛びついた柄によけいなゼロがつき

天も地も親子も一つ運動会

鳥取市 佐々木 静

孝行の旅へ晴れ間の富士も見た

琴桜横綱二句

琴桜勝っても酒負けても酒

猛牛ののど輪娘のため妻のため

羽曳野市 麻野 幽 玄

馴合いのとも別れるとも酒

陽は海へ消えると幼児信じとり

着飾って見たがかくせぬ農婦の手

河内長野市 井上 喜 醉

人生の夢は死ぬまで追い続け

反応を見せた顔色青くなり

ほろ酔いで歌った軍歌で歳がばれ

竹原市 生 信 笑 子

陽溜りの温さ貴方と二人きり

一本のツエになりたい婚約中

寄せ返す波よ羽ばたく日も間近か

和歌山県 ふきあげ 虎 城

受話機持ちかえて銚子の数かぞえ

便箋が余って愛の使者とせず

汐騒が夜を詠む詩を妨げる

新宮市 川 上 富 子

好奇心だけの見合いが実りかけ

黄昏が似合う着物を着た女

一月に咲いて紅梅ポーズとる

今治市 真山国彦

気の引ける音で賽銭箱に落ち

山菜に食傷して脱都会

御機嫌な外出妻の帯が鳴り

今治市 今井松花

瀬戸の春知らせる濃霧注意報

結納が来る日の母娘美しい

お弁当食べると帰す幼稚園

弘前市 小山内貞男

作文に顔出す母は稼ぎ者

本心を言っても酒のせいにされ

目的を秘める酒宴の猿芝居

寝屋川市 江口度

能力主義を真に受け社是に突走る

口約束勝手つんぼの多すぎる

食うだけは食ってやせたい妻のえご

新潟県 高野不二

ウルウ秒とは人間の几帳面

11PM見なきや眠れぬ倦怠期

カーフェリー石焼芋ものせて来る

和歌山市 原庄治

とうとう病院

土建屋のキリ インフレに泣いてます

病氣欠勤が辞書と句帳を枕元

月末は近し句帳に資金繰り

鳥取市 両川洋々

父の夢叶う日母もすこし酔い

金貯めて貧乏人を嫌い出し

ユートピアに居てユートピアをまだ探し

鳥根県 岩田三和

あやつればこれぞ生きがいある株価

珍客に子供は宝みんな見せ

大阪の長男土地は売らせない

鳥取市 藤本和宏

辻地蔵つたの若葉を着てござる

海猫の乱舞を見たり渚ゆれ

迷わされ裸にされてまだ覚めず

鳥取市 藤本佳女

子の夢が親に小言を呑み込ませ

空き地とも知らず野梅は香を放ち

針供養近し母と子の対話

大阪市 鈴木生仏

棺桶を造る大工は何時はいる

あきらめた桜も今年見られそう

見合いた女は鼻の穴が見え

大阪市 木村濁水

寒いこ鏡開きに精を出し

我こそは善人なりと初大師

初天神一際目立つ受験生

大阪市 花田 繁子

民宿の泣く暖冬で腰のばし
こんなにも皆が望んでいた平和
柳友は福祉の春に逝き急ぎ

岡山市 逸見 灯竿

灯も凍る憎悪の中へ息を吐く
煩惱の雪崩れはきびし猛火消ゆ

東大阪市 坂東 若芽

今年こそお金貯めます子の無心
仕合せですと出世を欲しがらず

守口市 岸本 豊平次

山頂に住み残照を一人じめ
古い方から食べてみな古くなり

岩国市 村井 西合

結局は按摩器よりも女房の手
あけるのがこわいあなたの玉手箱

橿原市 西本 保夫

割り切れるとこが取得の平社員
静観が出来る立場の平社員

東大阪市 落合 思月

おこらしちゃあ損だと借した方が折れ
施主の無理棟梁笑ってききながし

大阪市 河原林 比呂路

まっすぐに行こう頑固と言われても
家計簿の狂いもうれし孫が来る

岡山県 武元 柳子

もてなしの心ゆたかに餅を焼く
何んべんも母を泣かせて卒業す

島根県 谷岡 芳枝

父の血を確について筆の牙え
空しさをわからぬままに聖書読む

大阪市 藤田 頂留子

信号のない人生の味気なさ
(高島屋密教展)

鳥取県 福田 保子

法と美の心にさそう密教美
動揺をかくすライターの炎揺れ

和歌山市 小川 佐知子

せめてもと受験する子の靴揃え
いつからか米磨ぐリズム三拍子

島根県 梶 みどり

思い出がからんで廻る走馬灯
あやつりの糸をそおっとはなして見

河内長野市 森本 黒天子

持ち上げた石の重さに年齢が知れ
曇り空雪がほしそな顔で待ち

羽曳野市 麻野 幽立

旅人へ旅人が道問う嵯峨野
両の手で受けた御神酒が舌で消え

鳥取市 藤 本 鎮 也
げんこつで言いたい事を握りしめ
蟹に似た顔が売り居り松葉がに

鳥取市 藤 本 恵 子
甘えたい娘心をすねて見せ
アラジンのランプが欲しい物価高

仙台市 川 村 映 輝
選挙だから過疎の村へも拡声器
毎日をテレビとくらす不倅せ

今治市 薦 本 昌 道
恍惚のオアシス子の家孫の家
外孫に作業衣の手が憚られ

鳥取県 高 尾 京 子
暖冬をミニのヤングが胸をはり
判の無い離婚届けをちらつかせ

新潟県 栗 和 田 清 子
義理義理でがんじがらめの保険金
憤満を美容院にてうつしてみ

新潟県 市 川 一 峯
何年も貯めて指輪を一つ買い
割勘ときまつてからの飲みっぷり

愛媛県 小 山 悠 泉
ひたむきな恋病室へ花を活け
仲裁をして世話好きを自認する

大阪市 小 谷 清 女

燃えた日を今更悔やむ身勝手さ
くすぶって燃えぬ生木に似た夫婦
茨木市 日 高 文 子
受験期の母ころろと気が変わり
ああ言えばこうと思春期でねている

鳥取県 林 露 杖
散ることも忘れて枯れた室の花
渡された合鍵小さな覚悟きめ

守口市 樋 口 一 峯
長髪の巡査何んだかたよりなし
正月の赤字が消えて咲く桜

羽咋市 三 宅 ろ 亭
花鋏チョキンチョンと春を切り
五十円の豆腐今では別の味

備前市 武 内 雅 堂
枕木のように夫が出世せず
一粒種のわが子を遠くからながめ

鳥取市 大 塚 豊 生
改札で声をかけ合う共稼ぎ
大学をみんな出させて無一文

大阪市 平 井 露 芳
節分の鬼へ貴重な豆を撒き
厄年や神や仏を梯子する

今治市 伊 藤 一 郎
Uターンしてふるさとの海に生き

新品の衣裳がせめて二度の式

今治市 原 田 輝 親

恐ろしや土建屋急に政治づき

マイホーム借りる事から歩き出し

倉敷市 井 上 濤 笑 子

長き過去忘れて寒の餅を焼く

雪の音聞きつづけて心澄む

堺市 栗 本 藤 持

高度成長何でも捨てるくせがつき

週刊誌結婚離婚もう飽いた

名古屋市 大 林 曲 手

傷いた指に物がよく当り

煩惱は去らず紫煙は揺れに揺れ

泉佐野市 大 工 静 子

嫁が寝て犬が晩までおあずけし

一時間五回寝返る孫とねる

大洲市 堀 内 曉 風

七転び八起の屋台引くふたり

去るもの追わない会社斜陽なり

島根県 安 達 小 茶 坊

よろこびも悲しみも妻そばに居り

毛筆の賀状見飽かず老夫婦

大阪市 新 川 貞 祐

尾も振れず余生一人の2DK

仏壇に留守を頼んで歯科眼科

貝塚市 行 天 千 代

お位牌になって居るのに来る賀状

子を持つて子の無い人を哀れがり

須賀川市 平 栗 金 太 郎

川魚は骨ごと食えと云う若さ

網棚にスキー吊り下げ眠り呆け

青森県 岩 淵 一 星

白鳥より車が多い日曜日

医者よりも先手に妻は酒をとめ

大阪市 松 を か 右 式

将として死なず闇屋で巨富を積み

向日葵が摒越し見てる金魚売

高槻市 山 田 ス ミ 子

インスタントで今日もすませた共稼ぎ

事ながれ主義で今日も無事にすみ

大阪市 今 井 隼 人

道端に落ちた一円踏まれてる

物価高老齢年金追いつかず

大阪市 吉 野 志 津

はずしたが捨て切れずいる忠孝の額

ローカル線初発のだけがはやってる

大阪市 須 浦 っ ね

寡婦の家亡夫の標札守り神

専売公社吸い過ぎるなど書いて売り

寝屋川市 福 富 隆 子

指紋磨滅内職の日々暮れる

島根県 榊原 秀子

四季のない花屋で冬の花を買う

広島県 河村 浄美

まな板がトントンあなたを待っています

青森県 波 ただお

順法のおかげ車中で酔がさめ

豊中市 安 藤 寿美子

かぶってる猫の下までお見通し

岡山県 吉 田 落猿

やんわりと豆腐に続く物価高

松山市 谷 のぶお

空箱を遺産に老母逝き給う

米子市 増 田 竹馬

伯耆富士寒波の中にたじろがず

鳥取市 有 田 鹿の子

寝て暮す夫へ暖冬の梅生ける

氷見市 有 磯 涙月

放出の大豆業者の糧にされ

和歌山市 島 本 泰子

喜びをかくしきれずに訛出る

今治市 古 野 伶人

蜜柑豊作

豊作の蜜柑は味で買うて来る
竹原市 古 江 雅鳳

さよならが云えず泪となる別離

大阪市 白石 石 潔

後悔はすまいと書いて日記とじ

鳥取県 福田 陽山

(沖縄行)

人形とそっくり那覇娘の眼の魅力

守口市 池 川 伸子

正月はカラーテレビの空の色

寝屋川市 井 上 武松

共稼ぎ妻はどこかで強くなり

出雲市 板 垣 草丘

三角に切って豆腐の値にふれる

兵庫県 高 橋 近江

思いつき吉日暦は探さない

豊橋市 鎮 浪 翠月

気やすめに慰められて腹がたち

大阪市 広 畑 賛平

木枯しの通夜ふるまいの酒にがし

大阪市 村 島 秀村

梅の木は花で愛され実ですかれ

大阪市 内 藤 ますゑ

故里の餅送り来し亡母しのぐ

▼前号二賞候補句訂正(大坂形水選)
病窓の雲ちちになりははになり

福島 城山

同人雜詠選を

省みて

西尾 栞

生々庵主幹の多忙とオーバーワークを少しでも援助する常任理事のお薦めで、引き受けた同人雜詠選も早いもので一年経ちました。最初、主幹から引きついだ時の言葉に、同人選は、尤に三日かかるよと言われたが、成程凡才の私には五日はたっぷりかかったようであります。

昭和四十七年の五月号に、『選句にあたって』の一文を草してありますように、この一年間の選句の目標として私は、作者の個性を如何に見出して、それを尊重してゆくかという事而努力をしたことであります。

即ち、作者の職業を知り、年令を知ることが、先ず作者を理解し、その作品を理解することの最短距離だと思つたからであります。

昭和四十六年七月の路郎先生七回忌川柳大会の堀口堯人氏の『路郎とその弟子』の講演

にあつたように、路郎先生は弟子を育てることの名人であつた。そしてその弟子達の個性を如何に伸ばされたかということを話されましたが、勿論、私は路郎先生のようなわけにはまいりませんが、路郎門の一人として、その衣鉢だけは少しでも継ぎたいと願ひして、選にあつた次第であります。

このことについて、或時、同僚選者と話をしたことがあります。その選者は、記名を見ないで、先に句を選ずる。しかる後、名前を見る。私は全く反対でありまして、先ず名前を見る、そして知つてゐる作者なら容姿や言動を思い浮かべて、喜びの句があれば共に喜びの氣持で、哀しみの句であれば、又共にその哀しみの心になつて、選句にあたると言つたので、遂に意見の一致を見なかつたのであります。前記の選者は課題吟の選をされる態度で、雜詠吟の選をされる姿勢ではないと、今尚私は信じております。

昭和四十五年七月に「水鶏笛」という句集を私は出しました。その選句は、麻生霞乃先生にお願いしましたが、矢張り私を知つて下さつておられる先生は、私の句柄の句を選んで下さつたのには、驚いた次第であります。

以上、色々と羅列しましたが、如何に個性の尊重を以つて選にあつたかということを申上げて、過去一年間の御投句を茲に厚く御礼申し上げる次第でございます。

選者交替の弁

——水煙抄——

菊沢 小松園

昨年川柳塔四月号「近作柳樽」の選を任され、本年に入つて「水煙抄」と改題されてこの三月号まで一カ年、その間何の挨拶もせずただ黙々として毎月、只管皆様の句を見させて頂いて来た。長いようでもあり短かいようでもある一年だつた。

誰もが思ひ、誰もが書くことを改めて載せるほど紙面に余裕も無いし、私も忙しい川柳人の一人として暇もなければそんな野暮氣もないと思つていたが、愈々三月限りで降りるとなると多少の感慨も人並に出る。

同人詠草の「川柳塔」欄と違つて、「水煙抄」となると柳歴も雑多なら、投句の態度も多種多様で随つて句のレベルも俗に言うようにピンからキリまで実に玉石混着、伝統に物を言わせてこれが本當の川柳だと言う人もあれば古い殻を脱却して新しい時代の息吹きを見せる新興の意氣の盛んな方もある。選ぶ方

もそれこそ興味も湧くし好い勉強にもなる。
上限と下限の距たりが余りにも甚だしいので
時には、撫然たることも最初の頃には屢々あ
った。それも月を逐うに従って慣れも手伝わ
てそう抵抗を感じぬようになったが、選者と
しては、それは反って対応に慣れ過ぎ、心を
失う筈になつてくるのでは無いかと努めて自
戒した。私に許せる範囲で新しい傾向の句も

良いと思うものは相当に頂いて来たつもりで
居る。それは今日の川柳を生かし明日の川柳
の上に良いことを齎す所以でもあり、率いて
は自然に川柳塔社の上にも決して無駄なこと
では無いと私なりに思われたからでもある。
選句を通じて地方の投句者とも意志の疎通
も出来、語り合える多数の知己を新しく得た
のは望外の収穫であつた。何にも増して毎月

色々と教えられることの多かつた事も事実に
あり、殊にこの欄から幾人かの同人を推挙出
来たことも大いに喜んで良いことと思つてい
る。
新しい選者もこの月から登場される。一層
張り切つてよい句を見せて頂くようこの上の
精進を願うこと切なるものがある。ありがと
う。

一塊の

高鷺 亜鈍

一塊の土に魂しいのりうつる
風・光・山蛭・蹄・大統領
公害にめげず純粹の花咲かす
科学的非科学的な月の両面
びいどろの思念に純粹の花開く
肋骨へひかり射し込む日がまばら

檻褻たりとも襟かき合すお元日
文学の街よ詩の友よさようなら
文学の街もへドロの海に沿ひ
文学の街にも壁あり耳があり
詩の町に文学小道は観光路
貧すれば貧する文学の町も食えず

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

せめて派手なネクタイ老醜かはい得ず
酒はいいものに断絶歩み寄り
本音らしいまなざし警戒ゆるめない
たちろぎを見せれば虚言積み重ね
自動巻き怠けた今日をつく図星
手を貸してくれる裏方の冷たい手

大洲市 米沢 暁 明

早春の主役土筆と猫柳

京の春こころ牛車に出合いそう
主人へも内緒を着せて七五三
戦友に会えば必ず歌う歌
もつれ縁愛の醜くさ美しさ
後から呼はれ落ち目の身があわて
年輪の話せば苦勞した笑顔
エリートコース帰る勇氣もいるお酒
海よりの恩とは言わぬ別居論
出戻りといひ姉妹不仕合せ

東京都 池口 吞 歩

パパ、ママと呼ばせ月賦に追われる日
職人の子もパパ、ママで育てる世
パパ、ママに和魂洋才すらもなし
パパ、ママがモヤシのような子を育て
「お母さん」のCMが好き味噌も好き
今治市 長野 文 庫
押し出されそうむんむんとする若さ
ばつさりやと欲しいと思う日も
気休めに百まで保証してもらひ
行先は遠くもないと知りながら
地の果てに居て長生きを考える

連想は楽し

香川 醉々

平安二月号「本社新年句会報」を見てみると、次の句が目についた。

独楽の芯牛は寂しき瞳をもてり 冬二
この句を見たとき、私にふと、秋元不死男の「万座」の中にある三つの句が浮んできた。

悴むや胸に生れて倒れる独楽
クリスマス硝子越しなる馬打たる
すみれ踏みしなやかに行く牛の足

今年、牛どしということ、あちらこちらの句会で、随分「牛」の句が詠まれている。私などは、郷土玩具に興味を持っている。牛という題はすぐ牛乗り天神などと結びつく。そこで牛乗り天神や牛乗り童子の句を作ってみたが、見事に没。なかに選者が郷土玩具などは知らないから、実感が湧かず、没にしたのだらうとその辺はあっさり割り切れる。

兼題でも席題でも、やはり自分の趣味・興味にすぐ結びつく。このあたりに連想の持つ楽しさ、おもしろさがあるのだらう。詩人冬二氏には、牛という題は、すぐ故郷（もちろんどこか私は知らない）——幼年時代——遊び——独楽と連想されたのかも知れない。その表現が前述のようになされたの

だらう。と私には考えられる。

選者は、田中秀果氏だったから、選者にはまた別のイメージが描かれて抜かれたのであろう。

これも私の連想の一つ、独楽が完全に回っているときは静止しているように見える。そのとき芯は、なんともいえない孤独感を漂よわす。それと一匹の牛の瞳にある孤独感。その孤独性の相似とも思われる。このような鑑賞もできるでしょう。作者は両方とも違うと言われるかも知れない。しかしそれは私にとってどうでもよいこと。要はこの作品に私は共感を覚えたということである。共感がなければ、私の連想に、不死男作品の三つの句が浮んでくるはずがない。

もちろん不死男作品と冬二作品とは異質であり、何等の関係はない。それを結びつけ得るのは、私の頭の中の連想作用だけである。連想とはなんとすばらしい楽しいことよである。

わからない川柳

飯田悦郎

十七音の世界は平明で余韻のあるものが最も良いとされていることは誰もが承知していることである。その川柳がなぜかわつていく詠まねばならないのか、一考を要す

るものである。それには多くの言い分なり原因なりがあると思う。例えば俳句の場合をあげて見よう。

毒吸って生き比婆山の墳に栖む 左藤鬼房
鮮紅の屋月墜ちる小牛の前 金子兜太

句の内容は別として右の場合わかつたようではないが二三四繰り返して読むとだんだんに意味がわかつて来るものである。次にある川柳句集の場合

千古より機微に勝ちたる者の雲よ
隕石のくほみよお前の墮落が地球だなんて

右の句を読んでわからない、五、六回読んでわからない。五百句余りの川柳句集である。全部読んだがわからない。これが川柳かと言いたい。しかし、右の句はどのように解してもよいらしい。実にふざけた川柳だと思ふ。俳句が川柳より優位にあるのは何故だろうか。それは俳句には美・悲を主眼として脱俗しているのに反して川柳はあまりにも俗臭を盛りあげている。即ちうがち、諷刺、批判、ユーモアで反抗を示したものが多く、皮肉たつぷりに作りあげて上品な言辞では効果がないため激烈に人の肺を貫くようになり勝たずである。そのため川柳と云うものはこんなのかと誤認されるのである。だが川柳全部がそうしたものではないことは作者自身も十分に心得ていることである。川柳には協会はないが流派がある。それは伝統、革新、前衛、詩性、自由、時事、諷刺等である。それ故に川柳は美学的に立って人間味の詩美即ち品格に

重点を置いた句格の高いものを作りたいものである。川柳の先端を走る如くかのような前衛的な重苦しい難解な川柳は標準句とは思わない。川柳は識るものではなく感じさせるものである。

その限界を越えて感じとる川柳から考える川柳へと移りつつあるために変わった言葉を使うて折角のポイントを砕いてしまいくるなり、構造も心理状態も複雑になってきてアイデアオロギーの過じようになりかけるのである。われわれ川柳を愛し川柳の老化を防ぎ、流派にこだわらず川柳の若返りへ前進して品位を高めると共に、川柳を通じて社会を明るくすることが現川柳人の使命ではなからうか。

奥能登の思い出

河内 天 笑

能登の初秋の風景画を、旅の恥はかきすてとばかり、二、三の見物人を無視して色紙へ絵筆をなすっていたら、あとでフロントの姐さんが「見せたいモノがあるんで三階の広間へ来て下さい」との事である。

三階の広間の真中で老人が正座している一瞬緊張した中で互いに頭を下げる。「先程ロビーで絵をお画きになつてゐるのを拝見して絵にご趣味をお持ちの方なと思つてお招きしました」ていねいに僕を呼んだ

わけを話しながら、三十帖もあろう広間の四面に飾った日本画の力作を見せてくれた丈は鳥の子地の裱から色紙の絵まで百点を越す水彩画はまばゆいばかりであった。一枚一枚作品の背景などを説明してくれる老人の眼は輝いてみえた。形容の出来ない程下手くそな自分のなすり絵を見られていたという恥かしさが、余りの感動にいづつかふとんでいた

かと思えるのである。そのほかにトラック便の輸送会社のマークにもカンガルーが例の袋の中に子供を入れて坐っているのがあったがやはり前者の方に何か親しみとおかしさを感じた。

老人のはこのホテルの主人公で日本画四十年の超ベテランであらせられた。『光甫』という雅号の色紙を二枚載いた。何でもやってみるものである。白髪まじりの瘦せ形のこの老人、日に一枚は絵を書き上げる事が今の生き甲斐で健康を保つ何よりのたのしみだとうかがった。気の向いた時に川柳を作る私には神様の言葉の重みを感じた。

大阪人の或る友人の笑い話にこんながある。彼が名古屋へ転動して来た。あの時隣家の可愛らしい女の子に、「嬢(とう)ちゃんいくつ?」と、ごくありきたりのことを問うたところ「四十二」と答えられてビックリよりも一瞬キョトンとさせられたよく考えると大阪の方言では女の子をとうちゃん又はとうさんと呼ぶのはよく知られているのだが、名古屋でしかもおさない子供にこれを言っても判る筈がない、彼の友人はそこまでは思慮せず話したものだから右のような笑えない問答とはなつてしまったのである。

私のメモ

吉田 水 車

或る運送会社のマークに親猫が仔猫を啗えてこちらを向いている漫画的な図柄がある。まことにほえましいユーモアに富んだものである。なるほどこれも一種の輸送には違いない。このマークを選んだその会社の幹部諸氏の童心豊かな感覚は、その営業方針にも好影響を与えているのではない

川端康成の有名な「雪国」の中で「向う側の座席から娘が立つて来て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ」と言う一とくだりがある。窓を落したという表現にも感心するがこの窓を開けるのに、おとす動作をするような客車は今にはないかも知れない。これを読む今の諸氏はピンと来ないだろう。蛇足ながら、この窓はその下の方にあるくぼみに指をかけて持ち上げ少し向うへ押してすんと、まさに落して開けるのである。D51をなつかしむと同時にこうした客車にも何か哀愁のようなものがあるにはある。

川柳 中山道六十九次 (3) 富士野鞍馬

9 深谷

熊谷から二里三十町(一一・二キロ)

此駅六七町ばかり民家相對して巷をなす。

余は左右に敢在す。ここまでは大木の杉むら多く道幅も広く、おのずから江戸に近きを知る。

10 本庄

深谷から二里二十九町(一一・一キロ)

此駅民居三四町ばかり相對して巷をなす。

祇園の神木あり、六月二十七日祭あり。

当駅を過て傍爾堂村に、上州武州国界の標示を建る、故に名とす。

11 新町

本庄より二里(七・九キロ)

六七町ばかり民家相對して巷をなす。

上野、武蔵の国界当駅にあり。

12 倉加野

新町から一里半(五・九キロ)ここから上

13 高崎

此駅六七町ばかりありて、民家相對して巷をなす。其余散在す。此所より日光山の道、厩橋の道あり。惣て此辺には國に桑を栽え家宅には多く蚕養をいとなみ、繭をとり、これを煮て糸を繰り、功を積て絹に織る。

倉加野から一里十九町(六キロ)

此所は松平右京亮侯居城の地で、城下の町長く、凡そ三十町ばかり、繁昌の地也。此国都会の地にいて、月毎に六度の市あり、第一に上州絹、館煙草、白目竹とて馬の鞭に用ゆ其他種々の物を出して交易す。賑ひいはんかなし。と「木曾路図会」にあり、この館煙草は、多野郡山名の館という所の産で、上物ではなかった。

上州の館を煙草屋地切りにし

巨眼(九五三)

―吉良上野介を諷す

すれ違ふ猪牙に館の香国府の香

寿山(八三三)

―国府は上物

近くの佐野村は、佐野源左衛門常世の旧蹟

で「鉢の木」の話は有名である。

鎌倉幕府の執権北条時頼は、出家して最明寺と号し、諸国行脚の途次此所を通ったとき大雪に遭い、貧乏武士佐野源左衛門の家に一夜の宿を乞うた。この時常世は焚木もないので鉢の木を焚いて、粟飯でもてなした。

最明寺いんぐわな所へ宿をかり

(一八七)

常世心配寒いやら煙いやら

丸(二五一三)

源左衛門いとおんみつに宿をかし

玉章(二三三)

最明寺もつと泊るときらずめし

(一六三)

そして常世は「鎌倉に御大事あれば一番に馳せ参じ申すべし」といって時頼を送った。

後、時頼が軍勢を鎌倉に召集した時、常世は一番に駆けつけたので、前の雪の夜の宿泊の礼として、加賀の梅田、越中の桜井、上野の松井田の三ヶの庄を与えたという。

最明寺大きな木質泊りする 三交(二九一九)

鉢の木を大木にして御返礼 (九二〇)

この辺から絹売りが江戸へ出たのであるが、多額の金を持っているので、追はきか

い殺されたのもあり

絹売に前後から出てまでといふ

虱虱(傍五九)

何用でよぶときぬうりどうをすへ

(明六信二)

絹売りの墓を地蔵のわきへ立て

(四三)

きぬの荷を庄屋へはこぶむごいこと

(安元梅三)

きぬうりにゆるしをくれるやはら取

(四九)

―自衛のため柔道を習った
という川柳がある。

14 板 鼻

高崎より一里三十町(七・二キロ)

此駅民居三四町ばかり相對して其余は散在す。貫前(ぬきさき)神社、八幡宮あり。

15 安 中

板鼻から近く三十町(三・三キロ)

此駅は板倉伊予守侯の領地で、民家十余町あり、其余左右にあり。

16 松 井 田

安中から一里三十町(七・二キロ)

此駅を松枝ともいふ。宿中に八幡宮あり。

これより妙義山に赴く、

妙義山は、波古曾神社、法性坊尊意を祭る

妙義大権現があり、参詣人も多いので、門前に旅館が並んでいた。山は白雲、金雞、金洞

相馬の四峰から成り、高さ一一〇〇m、奇岩

怪石で名高い、今は指定名勝になっている。

法性坊は延暦寺の座主で、菅原道真はその

弟子であった。後、当山に閑居し遷化した。

謡曲「雷電」に作られ、その川柳も多く作られている。

神鳴も法性へ坊わたりに来

(拾四六)

―神鳴は菅公

僧正へ大きなお手を三度さげ

(安八智二)

―勅使三度

まごつく中へ法性坊参内

(安七七一)

―参内して祈禱

17 坂 本

松井田から二里半(九・八キロ)五町ばかりの町。上信国境を十八町下ると横川関所がある。女免符、鳥銃の御改めなり。

名は碓氷関の掟は厚い所 要宜(八六二)

国境の標杭は碓氷峠の頂上熊野神社にあり、

碓氷峠は一二〇〇mの嶺で、信濃川と利根川の分水嶺である。ここから軽井沢まで二十二町。

この峠で、日本武尊が東征の帰途、さきに

尊の命を救うため相模離に身を沈められた

妃、弟橘姫を偲ばれ、東南を望みつつ三嘆し

て、「吾妻者耶」(あがつまはや)と仰せられた。それで東国を「吾妻(あづま)国」と

いう。(日本紀)

日本武碓氷峠でしたくなり

(明六梅二)

橘を碓氷の嶺でなつかしみ 佃(二七九)

吾妻に縁もうすいと御ン歎き

山笑(六三九)

峠にて橘姫をなつかしみ 解保(八六九)

海に入るみさを山で御したい 佃(九九四)

さてさて臼井えにしよなわが妻よ 水鏡(二〇六二)

源頼光の四天王の一人碓氷貞光は此所の出

生で「貞光塚」「貞光の試し石」がある。

貞光は褌袍脱げもした男 (九九)

―元追剥もしたという

六人の中で貞光手盛にし

―信濃者大食

貞光は椅を馬につけて来る 船行(傍二一)

―椅垂保輔を捕えた

(明元義二)

色紙短冊
書画用品

大坂丹波

丹波堂

せやまにせやま

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

人間を支えたルール古しという

尼 緑之助

我々年齢者は、常識とか、道徳とかのルールがあつて、安心してこの世を渡ってきたが、今日の若い者は、そんなものは一言で、古いという、封建的だという。一体今後はどんなモラルで生きていったら良いのだろうか。人間を支えたという言葉は流石老巧であり、その言葉によって格言調を旨く脱して居られる、そして一読して怨嗟にならず、若い者の新しいモラルを笑いながら、許容しておられるところが作者尼氏の人柄が偲ばれる。

通知簿へ母が笑った子も笑い

小野 克枝

これは、すぐ良い成績の通知簿とは思わない。男の子だったら低学年、女の子だったら高学年でも良い。素晴らしい良い成績だから笑ったのではない。私に似て、音楽も体操も

と思わず、お母さんは笑ったのである。それで叱られるかと思つていた子供さんもつりこまれて笑つたのである。オール満点の通知簿だったら、子供は初めから笑っているだろう。そうでないと川柳にならないが、尤も作者のお子さんは良く出来なさるから、オール満点であることは間違いないけれども、私はこんなに解釈させてもらった。

人生に中年と云う座を貰い

清水 一保

中年は、青年と老年の間で、慣熟した、分別盛りの年頃だが、上五の人生と下五の座を貰いの間は、青年でも、老年でも句にならない。中年がドンピシャリである。その座にいた中年は、責任のある、働き盛りの、甘いも酔いも分つた、酒も旨いし、女も面白い中年で、世間の眼が許さない痛し痒しの年配の座だから、下五の座を貰いが千金の力もつて光っている。作者は正に中年で、東伯町の町会議員さんだから、この感が特に深いことであろう。

箸枕孝行な養子の席を決め

林 瑞枝

この席は、一番上座である。養子というものは良ければ良いが、悪ければ、もちもさげもならないものである。遠慮勝ちの孝行な

養子の席を、箸枕でもって決めてやる親心が、断絶の世に誠に美しい。

向うでも受話器を包む深い仲

大矢 十郎

こういう光景はしばしば見受けるが、こちらも、向うも受話器を包んでいる、情景羅如とした典型的な川柳である。

民宿の雪なき夜の腕角力

谷 無閑

今年は暖冬異変で、スキーヤーをあてにした民宿は、一億円の損害とか新聞は報じていた。スキーヤーの脾肉の嘆を唧つのに、腕角力をしている朗らかさが見えるようで、ほのほのとした一句。麻雀や、花札ではいけない。腕角力である。雪なき夜と文語体で季語が入っているから俳句のようだけれども、幅広くとる川柳である。

其の他の佳句

まんまるいとは人柄を言い足らず

バイブルに手乗せてより愛重し

嫌なのがいるから後列で並び

保母さんがあやす事情の子と別れ

インフレを政府団属であおぐよう

山頭火おれにも同じ想の詩

変身へ五十路の命華やけり

代筆のはさんだ智恵が気に入らず

千 翁

牧 人

孤 呂 二

敬 一

通 朗

弥 栄 子
村 諷 子

水煙抄

秀句鑑賞

——前月号から——

川村好郎

会者定離虹弓なりに頑張りぬ

逸見灯竿

「恋よ恋一期一会のものならず『露杖』こんな心でふたりは燃えているが、所詮は会者定離だと悟る日が来るのか。

弓なりに如何に虹が頑張ろうともやがては消え失せる。といつてははじめから会者常離と思えば余りにも味気ない。頑張るだけ頑張りたい。虹弓なりにと詠んでいられるところ流石老巧である。

ほほ伝う妻でも母でもない涙

関美子

妻として母としてうれしい時もある。又悲しい時もある。しかし又一女性として、これがわが一生であろうか、不慣れにも思い、さびしくもあり孤独に泣く涙もある。夫たるもの、いや男たるもの女として人間として妻や母をながめる事も忘れてはならない。こんな風に男である私は感じる句である。女性

心理をうまくつかんでいる佳句である。
待ちぼうけ小さな今日にしまし

川上富子

デートに限らず余りに期待し、自分本位にはなやかに考えるから、裏切られ、不首尾に終るとがっかりして、怨み悲しむ結果になるのである。小さな今日にしましといはうまい表現であり、待ちぼうけを凡句にしない腕を買う。

アルバムのこのとき泣いたなあお前

三宅不朽

恋愛中または結婚早々はからげしが燃えているようなもので無我夢中であり、あついてものが必ず消失する。夫婦愛とは火鉢の灰の中に埋れる種火のようなもので互にその火を大切に消さぬように育ててゆくものだ云った人がある。泣いたなあお前と何十年の夫婦生活をつづけてこんなに語り合えるのがほんとの幸せな夫婦でなかるうか。平易な話し言葉で深いところを詠んでいるのに教えられる句である。

エプロンがこんなによくれた日の感謝

坂東若芽

長い間の斗病生活をされたこの作家が自ら湧き出た感激であろう。この作家に限らず、働ける喜び感謝は我々忘れてはならない。エプロンがこんなによくれた、私ばかり苦労してと不平が出ていないだろうか。実感句とし

て素直に詠んでいられる。

汚れた胸を飾る勲章よく光り

阪上十止庵

何々褒賞を頂いてカメラにおさまっている人、ふと汚れた過去を顧てよく光る勲章を見て苦笑を押えている人もあろうという皮肉な句である。貰う資格がないと突き返す人より或は雅気があつていいかも知れぬ。

すぐ濡れる傘を乾すのもおんな

落合思月

男なら馬鹿げた手間と笑うかも知れない。しかしこんな始末のよい妻であつてこそ、内助というのか。こんな妻を持つ夫は左のものの右にも置かないやたけたものである。それでよいのである。面白い着想である。

嫁がせて最も長き夜となりぬ

堀江芳子

初子結婚という前書きがある如く、嫁がせた母親のうれいともさびしいとも感慨無量の気持を最も長い夜となりぬと表現されているうまさ月並みから脱出している。

置き物の牛生きかえる年が明け

佐々木静泉

丑年にちなんで牛の句を沢山拝見したが、観念的な誰でも詠むような句が多かったが、この作家は或は丑年か今まで牛の置物をしまっていたが今年は丑年だからと出して飾られたのではなからうか。うなずける句である。

抄異と柳川

方古田戸

本年は親鸞聖人生誕八百年、立教開宗七百五十年、親鸞の流れを汲む浄土真宗の十派が今度こそ手を握り合って前進しようという。今までは十派どころか、東西両本願寺の間さえ必ずしもしっくりいってはいなかったようであった。それに、お家騒動みたいなことも度々報ぜられ、それだから仏教は駄目だと世間から顰蹙されていた。

しかし、信者から見ると、我家も代々の信者、私もその一人なのだが、こうした醜態は決して嬉しがることも告めるべきことでもなく、むしろ恥しささえ感じるのだが、じつと落着いてみると、人間の醜い半面を今だに晒している処に宗祖の深い心があったような気がしてならないのである。

親鸞の生涯を傾けた大著は「教行信証」なのだが、これを読んでいる人は少ない。僅か一二〇行、八四〇字に過ぎない正信偈はこの大著の丁度中央部にはさまれている極めて短い偈文ながら、その精髓を尽し、真宗門徒はもとより、一般にもよく、広く親しまれている。だが現代人が親鸞といえはすぐ結びつくのが歎異抄である。

一分間の柳論

川柳をつくる人、何かを書く人は、その発表する場処にその句その文を載せることを欲する筈だと思えます。その場処は誰かがつくり発行しなければならぬ。しかし趣味の本はどれも余程のことが無いと経済的には苦しいことが常識である。私は川柳をすすめる時に自分を残す十七文字だと推測するのと発表される柳紙と柳誌なりに協力をして欲しい事も話すのです。作句の上手下手は自分が作句している内に分るものだからちよつとの先輩のアドバイスだけでいいのです。私とこの「川柳大阪」活版B5

児島与呂志

一枚ですのに、七十人の部費でやっとなので、川柳塔が二百円なのは私は安いと思うのです。ただ私は文や句をボンと送れば本に載り、句会に出席して作句して入選すれば本になると云う考え方から、趣味の本をみんなの手で重厚にするため、年に一、二回はポケットマネーで読者をふやす運動を展開したいと思えます。たとえばボーナス月に二百十六円ナリを三百同人がハタク気になれば、三百冊増刷できるといふことです。同人のみなさん、いかがでしようか。

歎異抄は明治までは、その内容があまりにもドンデン返しというか、出世間的であるがために、門徒には禁書になっていた。近角常観、清沢満之両師によって解放されたが、庶民の心が芽吹いて、その精神を誤らず摂取できると見透されたからであった。

歎異抄は遺弟唯円の手になるものだが、親鸞の罪惡深重の自覚が徹底的に紙背に溢れている。

私が歎異抄に始めて接したのは中学三年生の頃で、倉田百三の「出家とその弟子」を読んだ時であった。倉田氏は一哲学徒として書いているので、宗門の学者からはかくの批判もあるが、日野左衛門と出合う序幕からは素直な生き方を、東國の信者と膝を交えて語

る言葉は歎異抄の第二章が引用され、信ずる心の深さを学んだ。更に後段、かえでとの恋愛と寺の事情との板狭みになって悩んでいる唯円を導く親鸞、人生を活きたとは何かを感激を以て読んだものであった。

私の人生観の骨格はこの辺りから育ち始めた。私が川柳を初めたのはそれから余程の年月が経ってからではあるが、入門の当初「人間陶治の詩」と教えられた師の言葉は間違いない私の人生を宛に角今日まで無事支え通して下さったのであった。

昨夏、親鸞の聖蹟を尋ねて、越後と東國を訪ねたが、その手始めは、親鸞が念仏停止に連座して流配され、その第一歩を印した直江津居多の浜であった。夏とはいえ、遙かに親

不知の險を振返った時、自ら愚癡と名乗られた親鸞の心が痛い程感じられた。世間の全てから叛かれ、誰ひとり奉仕して呉るものもない。施程の馬鹿はどこにおらうか。

「削ってしまったらひとりぼっち」

私の最初の雅号は「孤篷」であった。篷は船の屋根「トマ」である。一隻の捨小舟、これもやはり中学三年の頃、自らつけたのだ。その頃は、自分が独り子であることがたまらなく淋しかったからである。独り子の通弊、我儘で、我儘のために対人関係をスムーズにもっていく技術に全く欠けていた。こんなことで将来どうなるのかという不安も論とともに加わっていくのである。「孤篷」に私はとても最もふさわしい名前であったと思う。全く世渡りの下手な私、ええ格好なんかとてもしてられないと思い始めるのである。

一分間の柳論

よく川柳下積み論を聞く、この反省としては勿論作品を以て問う以外に方法はないので、作家の奮起を促す訳である。また川柳の名称癡絶論も見える。その論拠がいわゆる川柳時代の作品、選句のイメージから来るとすれば、こでちよつと考えてみたいのはもととも川柳は人の名、号である。その人が選者として抜群のはまれ高かったところの短文芸「前句附」の附句を川柳と愛称したものである。全く五・七・五形短詩としてそれを川柳となえている

「阿呆ならこそ誰もせんことをする」

あいつは交っている、と家人からも世間からもいわれていたのであろう。私自身には私なりに計算も設計もしての上である。その計算の基礎は川柳から与えられ、そのもう一つ奥には親鸞の慈眼があったように思われる。東国の旅の最後の夜、板敷山の覚悟寺で泊めて貰った。親鸞が自分を嫉む山伏弁円に狙われながら常に往還した所である。その夜ひどい雷に見舞われた。雷嫌いの私は広い庫裡の座敷で只ひとり震えていた。震えながら親鸞を憶った。親鸞が私の側にいて下さるような気がし出した。母に抱かれていたような気がした。そして、雷鳴と電光の中で、いつか目が醒めたら美しい日本晴の朝になっていた。

怖がりな親鸞の儘で、弱虫は弱虫のまま

吉田 水車

今日でもまた川柳その人の遺徳をしのんでのことである。川柳時代の作品と今日のものとでは発想からみても同日の論ではないが、むしろ川柳の精神にかえれと言いたい位であるし、今日の川柳は難かしいとする向きも多い。これこそ川柳のイメージチェンジではあるまいか。しかし詩名川柳癡絶論はまさに一つの警鐘であることに間違いない。同時にひんしゅくの対象とされる川柳は大方今日言う古川柳であることの啓蒙も肝要であらう。

生かせて下さっていたのだ。マイペースでいい、笑われてもいい。いつまで続くか知らないが、このいのちの限り。

「一期一会くもればくもりたのしまん」

川柳しているうちに戴いた何よりの贈りものは、自らの眼で、自らの心で、私なりにものの真実に触れてきたということであった。私の己惚心は

「真実はかく伴るとも知らず」

とまだ肩肘を張りたがる。そうした中で懺悔と感謝の心が培われたのである。

「一粒を押しただくも美容食」

「眺えたように間に合うおあてがい」

と喜んでるかと思えば、

「そうかいな、そうかいなと過信せず」

と疑心をはか捨て切れない。ふと、

「ふんまえた石が動いたあわてよう」

と気付かして下さる、引戻して下さる。ドンデン返しができるどころか、自らの欲で裏向けにしたのを当り前と思ひ続けている。それをもう一度ドンデン返しせねばならない。

私は万人の幸せはそこからしか出てこないと信ずる。

日本中を川柳一色に塗り潰す。それこそ阿呆の夢かも知れないが、そんな夢を捨て切れない夢である。

抜苦興楽とは苦をなくして、その後釜へ楽を置くのではなく、苦をその儘動かさず、その場で楽に転じることなのである。川柳はそれを可能にして下さる。こうして人間が陶冶される。それがそのまま歎異抄の心でもある

鼻っ柱つよい女房に飼育され 利美
鼻っ柱折れて失恋石を蹴る 祥月
鼻っ柱強い貴方を惚れ直し 英詩
鼻っ柱金のお話でもろく折れ 逸名
鼻っ柱ない女房と丸く住み 弘朗
鼻っ柱どこやら今宵の妻無口 潔朗
ざまをみるというとなつた鼻っ柱 古一方
もう後へ引けなくなつた鼻っ柱 好一
鼻っ柱くじく女房が今日は留守 古心
鼻っ柱折られてからのしほらしさ 春日
鼻っ柱相手を硬化させただけ 素身郎
患って鼻っ柱が影ひそめ 魚山
鼻っ柱強過ぎて知る孤独感 静泉
鼻っ柱撫でて勝ち馬ほめちぎり 佳子
鼻っ柱強い母にもある涙 恵子
佳
鼻っ柱そろそろ欠けて来た五十 緑水
鼻っ柱折られ夫婦に溝ができ 英詩
鼻っ柱折られやけ酒のんで去に 明春
鼻っ柱打たれるまでの鯉自若 十止庵
鼻っ柱かつては強き人の愚痴 伊津志
人
鼻っ柱へし折る金を貯めつづけ 洋々
地
持参金鼻っ柱を支えてる 輝親
天
鼻っ柱つよすぎて悔残る夜 潮音
軸
鼻っ柱腹芸秘めて折れて見せ

合い鍵

村上旭童選

合い鍵がも一つほしいあわてもの 好一
合い鍵は妻に渡して旅ながし 伊津志
合い鍵とは合い鍵知らなんだ 軒太楼
合い鍵へ火の気なき2DKの扉 季亭
合い鍵は僕の暮しを知っている 里風
合い鍵を渡して愛をたしかめる 十止庵
合い鍵の人来ずマンション灯残 洋々
ガス洩れの気配へ管理人があけ 三十分で見事合い鍵生れたり 善句
合い鍵は管理室にもある不安 美幸
合い鍵をあずかり一日おちつけず 杜月
合い鍵と一しよに言伝て頼まれる 暁風
合い鍵を渡し女の振りむかず カズエ
合い鍵をこんなに持っていた空果 悠泉
鍵っ子が鍵を落して待つ日暮れ 代仕男
合い鍵を渡して心の戸をあける どんたく
信じ切る立ち場で同じ鍵を持つ 扇水
合い鍵を渡し不倫の愛に生き 英詩
合い鍵を持たれているという自信 潔月
家中が合い鍵持って職があり 思人
計算の甘さ合い鍵笑うてる 重月
心の扉に合い鍵がない 一朗
合い鍵が小さい罪を作りあげ 暁明

川柳塔柳箋

一冊 七〇円 送料 七〇円

通信にご投句に

終電車財布に合い鍵だけ残り 弘朗
合い鍵の子をふと思う共稼ぎ 静泉
夕焼けに合い鍵見せて淋しい子 克枝
鍵っ子のポケットで合い鍵が踊る 奇童
鍵穴の素直さ合い鍵が憎い 凡九郎
合い鍵があるから梯子酒して帰る 明春
合い鍵の夫に負けぬ心意気 白水
合い鍵の妻も同じバスに乗り 鎮也
合い鍵があるかも知れぬおもちゃ箱 智司
佳
合い鍵という人生がおもろなり 古方
合い鍵を握る代理として疲れ 白水
合い鍵を隣へ旅は晴れてくる 千翁
合い鍵があつても家へ帰らぬ子 京子
体温のぬくさ合い鍵とり出され 魚山
人
一足早い合い鍵が炊きはじめ 貞祐
地
合い鍵が知ってる妻の稼ぎ高 暁童
天
合い鍵はお互いの手にある安堵 寿美子
軸
合い鍵の方もなくしてもう掛けず

初歩教室

題「光」

本田恵二朗

それぞれが生んだ句を、私のところへ旅立たせる前に、五六回は声を出して読んでみて欲しい。自分なりの節づけをしてやるのもよからう。音読をしてリズムカルにやれたら其の句は旅立たせてよい。リズムカルに音読出来なかつたら修正する必要がある。日本語は五七五調が一番リズムカルなことは誰れもが知っていることだが、それを無視しては初歩の習練は出来ないことを知らねばならぬ。リズムカルな十七音字ということを初歩者は玉条として作句することである。

出勤の肩へ光がはねかえり
 (出勤の肩で春光踊ってる)
 遠慮ない光が轍をうつし出す
 (いじわるな光が轍を浮きあげる)
 恐ろしさ知らぬ螢は掌で光り
 (螢いまとりこにされた掌で光り)
 屈辱に耐えて人生光りだし
 (屈辱に耐え抜き人生光りそめ)
 お馴染みのネオンに送られ都落ち

京子 無 大 かつ
 子 人 成 み

(都落ち馴染みのネオンに見送られ) 座五を名詞止めにした句が多過ぎる。してみること考えて欲しい。

お光りを豆球にしてことすまし
 (お光りも電化先祖をあきれさせ)
 光年を生きて星座にある自信
 (光年を生きぬき星座にある誇り)
 春光に生あるものが動き出し
 万人の祈りの手垢百度石光る
 (万人の手垢が光る百度石)
 よう光っての方がイミテーション
 雨戸洩る光が怠惰の心射る
 (雨戸洩る光に朝寝を叱られる)
 栄光を信じレールをひた走る
 彷徨す光と影の人生を
 (人生の光と影に戸惑う日)
 光線を上げたカメラが胃を歩く
 日光をむさぼっておく地下の職
 (日光に縁なく地下街に勤め)
 光陰に放っておかれたマイペース
 ご米光望み叶って下山する
 (ご米光たっぷり拝んだ歩が軽い)
 親の威光笠に着て押す横車
 宝石の光と影にあるロマン
 ランデブー粋をきかした稲光
 (逢曳へそれ寄り添えと稲光)
 快眠を朝の光が夢破る
 (快夢いま朝の光りが来て破り)
 入学の児らに陽光隈もなく
 (入学の児らに陽光がなめまわし)
 主人なき菊の新芽に霜光る

頼次 品充 同 三十四 同 度 同 貞祐 同 本蔭棒 同 つとむ 誓二 杜月 利美 吞歩利 露杖 美子

(主の逝きし菊の新芽に霜光る) 母の目の光り心の動き読む
 (母の目の光に心見透かされ)
 連休へ観光プランが押しよせる
 光化学異常体質みつけ出し
 陽の光坪百万に住んでもめ
 (日光料坪百万に住んでもめ)
 ピカ一の自信の肩にある孤独
 (エリーートの自信の歩巾にある孤独)
 ふき込んで苦労が光る板廊下
 (ピカピカの廊下に家風の良さを観る)
 望みなく光りなき老にせめて福祉を
 (老残へ福祉の光り欲しい夜)
 高松塚光りさし込み目を覚す
 有難い光りのわかる人の幸
 (有難い光り見つけてからの幸)
 夕立の前兆やろうか稲光り
 (夕立がいま来まっせと稲光り)
 ピカピカ光る夜星を見て帰り急ぐ
 (急ぎ足見守るように星光る)
 真夜中に恋する猫の目が光り
 (目を光らせおうて屋根の恋進む)
 盆栽に陽光芽を出せ出せと降りそそぎ
 (もう芽吹け芽吹けと陽光に囁かれ)
 見ておれ親の光で子を援け
 (見るに見かねて七光りを授け)
 後光さす豊胸の仏まぶしくも
 (豊胸の仏まぶしく後光さす)
 君が乗る尾灯消えるまで見送って
 (思慕の目が尾灯の光り追いかける)
 寂光の中尼僧の衣さえ

同 翁 同 一三 同 好 一 繁 志 つ ね ますゑ 濁 水 陽 山 潔 同 健 児

大 萬 川 柳

「長 男」

入選発表

選 者 川 村 好 郎

投句総数 六百九十五句
入 選 六 十 六 句

長男が夫に似てる頼もしさ

倉 敷 千 翁

長男をこんなに重くさしあげる

鳥 取 京 子

長男が出来てやっぱりほっとする

大 洲 暁 明

長男もついに郷里を捨てる肚

大 阪 一 栄

長男と同居の余生羨まれ

鳥 取 静 泉

長男誇生五月の鯉もよう泳ぎ

大 阪 柳 志

長男へは次男と違う叱りよう

大 阪 生 仏

長男の取柄はわしと梯子酒

堺 天 笑

長男の名を待っている母子手帳

大 阪 緑 水

長男の脱脱ぎ捨てていく旅路

岐 阜 春 雄

長男で継ぐ職でなし文化財

神 戸 どんたく

仏壇の鎖を長男断ち切れず

松 原 重 人

長男が生れた鯛よ赤飯よ

倉 敷 扇 水

長男の嫁だけ家風を背負わされ

桜 井 雀 踊 子

甚六が一番先に風邪をひき

寝 屋 川 度

長男はばあさん好みの子に育ち

大 阪 新 之 助

あいつも長男どこか我れに似る

名 古 屋 弘 志

長男の嫁で世間の瞳がきびし

倉 敷 白 水

長男の夢バラ色に炎えている

岡 山 品 充

故郷ではまだ長男にある期待

倉 吉 菩 句

惣領に生れて土にしがみつ

岡 山 七 面 山

長男は国に捧げて過疎に老い

大 阪 智 子

長男だからと結婚急がされ

大 阪 好 一

長男を意識している通夜の席

大 阪 好 一

長男へしわよせのくる子沢山

大 阪 好 一

争えぬ血長男のお人好し

藤 井 寺 吸 江

嫁が来てから長男の他愛なし

東 大 阪 弥 生

長男が親父の二号に泣きつかれ

夢托す長男嫁がきて別居

神 戸 牧 人

ある時は長男の身の愚痴が出る

宝 塚 静 馬

長男の宿命鍵を渡される

大 阪 柳 信

予備校の長男弟が追ってくる

大 阪 柳 信

養子したあとへ生れた男の子

大 阪 柳 信

長男も別居希望の嫁がくる

島 根 芳 子

長男に頭下げるも老の坂

島 根 芳 子

長男の嫁に甘える老いの幸

大 阪 繁 子

そう思いながらも長男たよりなし

大 阪 繁 子

期待せぬ末っ子が長男の替りする

大 阪 俊 夫

長男が生れ話題が変わってき

大 阪 俊 夫

女難向きの顔に長男育てられ

大 阪 俊 夫

長男にまかすのれんは洗わない

奈 良 本 藤 樺

長男の鍬が光っている安堵

大 阪 文 秋

戸籍とは別の長男一人いる

大 阪 文 秋

末っ子が長男苦労まだつづき

大 阪 文 秋

長男の嫁に来る娘の稀少価値

大 阪 文 秋

長男の嫁小姑の目が悪い

大 阪 文 秋

東大阪 綾女

恋に生き長男養子に行くと言ふ

倉敷 白水

長男にされたは一声早かった

大阪 新之助

長男に試練の弔詞まだつづく

人ノ句

宝塚 静馬

長男と代ればよかった娘の勝気

地ノ句

倉敷 克枝

腹違いの長男立てている平和

天ノ句

富田林 弥栄子

長男を引き伸したい寡婦の汗

選者 吟

長男だから喪主あてにしていな

寸評

類句の多かった句を御参考に

独り子の長男覇氣なく頼りなく

長男です道理で弱い甘ったれ子

等々

私の抜いた句は

長男と代ればよかった娘の勝気

甚六が一番先に風邪を引き

長男が欲しいばかりに五人産み

長男の期待へまとも女児出産

私の頂いた句

長男が出来てやつぱりほっとす

長男に譲る日遠し過疎守る

長男も次男も過疎の村を捨て

私の撰んだ句

長男の鍬が光っている安堵

長男もついに郷里を捨てる肚

変った句

長男次男きわどく決る双子の児

頂いた句は

長男にされたは一声早かった

若者にまけぬ気 入歯かみ鳴らし
失語症かなしみふかく言葉なし
百科辞書役にたつ日を待ち続け
熱燭のゆび耳たぶへ耳たぶへ
理髪屋の鏡の中の花菜の黄
尻なめる猫 片脚を天にあげ
国宝にされて名人呆けはじめ
耳ほじるとき処女膜をふと思ひ

海老の尻尾

宅岐 光武 弦太朗

天ぶらの海老の尻尾はつまむため
心に垢 うたを忘れてより久し
七癖のなおらぬままに五十路すぎ
なつかしい夢の枕にまだ未練

昭和四十八年度

ベストテン

(二月現在)

一 弥栄子

八〇 富田林

二 克枝

七〇 倉敷

三 史好

七〇 松原

四 白水

六、五 倉敷

五 文秋

六、五 大阪

六 花梢

五、五 富田林

七 花茂津

五、五 和歌山

八 弥生

五、五 東大阪

九 本薩棒

五、五 奈良

一〇 重人

五、五 大阪

一一 静馬

五、五 宝塚

一二 好江

五、五 藤井寺

一三 柳志

五、五 大阪

一四 一栄

四、五 大阪

一五 清人

四、五 大阪

一六 梁水

四、五 大阪

一七 牧人

四、五 倉敷

一八 神戸

四、五 神戸

一九 小路

二〇 芳子

二一 真沙子

昭和四十八年度第五回

「ひがみ」五句以内

締切 四月二十日

第六回「ナイフ」五句以内

締切 五月二十日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三

大萬川 柳係

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック

み



積水化学

本社 大阪市北区岸見町1

柳界展望

(原稿締切毎月末)

有信 新之助

東洋樹、増井不二也両氏、神戸市在住および市内に勤務する川柳家によつて形成されてゐる。入会申込所は〒六五七神戸市灘区神原町四二二〇、吉野瑛二

中略、難解作品しか採らないという一部の臆測は誤解で伝統、革新、文語、口語いづれを問はず「投句を待っている」。

向を示唆するものと評。▼堺・若芽川柳会合同旬報で八木摩太郎氏が、麻生路郎師の堺時代、四十二年市立公民病院事務長をしておられた頃のことを、エピソードを交えて語っている。

▼「北斗」二月号で青木三碧氏が、二十年前の短冊と現在のを比べてみると、一向に進歩のあとがみられなにも関心をと。

タケダ

▼中島生々庵主幹は三月一日から六日まで心齋橋大丸で開催された「関西慈彩会展」へ川柳を「書の部」へ出品された。

▼ふあうすと五百号記念第三回紋太忌川柳大会が四月二十二日(日)10時から、六甲荘(神戸市生田区水野町の一四一)で開催。講演山本芳伸、題と選者は

「花」金山英子「南」岡田俊介「幻」窪田久美子「山」室田千尋「延びる」泉淳夫「素晴らしい」葵徳三「紋」鈴木九葉。選者は二十代から七十年代まで各題に登場させてゐる。席題四題(各題二句吐)投句料百円。投句締切四月十日、投句先またはお問い合せは〒六五八神戸市東灘区深江北二丁目十一十七光森良宛。

▼神戸川柳協会が二月十三日に発足した。理事長は鈴木九葉氏、副理事長は三条

▼第六回東洋樹川柳賞贈呈川柳大会は四月八日(日)十二時から海洋会館(神戸市生田区中山手通三丁目八六)で開催。兼題は「人形」「忠美選」「歩く」は小松園選「開発」「紅寿選」「宝石」九葉選「善人」清道選「年輪」東洋樹選。各題二句(欠席投句は無効)講演「古川柳との交流」堀口塊人。会費四百円。主催時の川柳社。

28

▼二月二十日朝NHKラジオで久米南町が紹介され、弓削駅前麻生路郎先生の句碑や川柳角力、川柳菓子のことなど、旺んな川柳活動の様子が放送された。

▼川柳ジャーナルでは「果樹園」選者中村富二氏が病氣辞退のため、ジャーナル作品と合せて、河野春三、時美新子共選で新発足することになり「決してジャーナルは一部の作家の特殊な傾向を支持するものでなく

▼岡田俗菩薩氏(広番会長)が元旦早朝、老人ホーム江波園の一室で心臓マヒのため急逝。柳歴五十年・七十九歳であった、謹悼。

▼森下冬青氏(金沢市)の新住所は金沢市上荒屋五の八五。

▼川柳なごやで池口香歩氏が昨年本誌上で川柳人協会に敢えて一言したことについて反応がないので、「苗木」誌上に「公開質問状」を発表した。『裸体詩』今昔「で後藤朗々氏が各地の秀句を取りあげた中に、堀江正朗氏(路郎賞の句も含まれ、四十八年の川柳の方

29

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠
☆食後すぐのむのが効果的です
☆くわしくは医師や薬局・薬店で



タケダ

頁。定価八〇〇円・送料一三〇円、ケース付きの美本に佳句が光る。申込所は〒九八〇仙台市本町二丁目十九一二五。

▼東野大八氏(美濃加茂市)三月号は座談会があつてベリジの気分が大変よい。こんどは女と男のバカ話風なものもやったらどうでしょう。

▼下村梵氏(新潟市)は第十二集「武玉川」の編集中心のこと。季刊年四回発行送料共一カ年六百元、執筆陣の豪華さが好評。〒九五〇新潟市船江町一丁目六二「武玉川文芸社」

▼井上吉次郎氏(京都市)は三月末限りで追手門学院大学教授を勇退された。記者生活三十年、学者生活三十年という方である。著書に「記者と学者の間」がある。

▼米沢曉明氏(大州市)は二月に婦人会の世話役で讃岐、阿波へ旅行し干潮へまだひまがあり満をまつ。大陸柳人同窓会は六月二十四日仙酔島に決定したとのこと。

▼小谷葉子さん(本社)は八尾菜の花旬会の四十七年度月間賞杯の永久保持となり

「川柳を知ってよかった」と。

▽同人の動向△

▼若本多久志氏(副理事長)は三月二十六日十一時から三十分間ABC TVの「竹&モンテシヨウ」に左ききで出演。正にタレントなみである。なお大阪府警察特別館内・近畿警察官友の会の機関誌「けいさつ」の友へ川柳普及と警察行政にユニモアを注入する目的で執筆依頼があった。(二月九日自動車追突事故にあわれたが一週間ほどの入院で全快された)

▼西尾榮氏(副主席)は四月から開講する八尾市市民講座で「川柳」を担当されることになった。

▼本田恵二郎氏(倉敷市)は年度替りの四月から児島公民館の講座の中に川柳講座が組まれ、初代講師となられた。医師会、ライオンズなどで川柳の普及に十年間、その成果は著実にあがっているとのこと。

▼奥谷弘朗氏(倉敷市)は老人ホーム「鳥取ふじつ荘」で講師として柳話をされ、購読者倍増に常から奮闘されている。

▼垂井葵水氏(和歌山)は

俳句と川柳の両道を歩んでおられるが、最近はその講演にひっぱりダコである。

▼本多柳志氏(大阪市)の末のお嬢さん仙子さんが金沢市で結婚、地方の風習に興味をおぼえた。なお新夫婦は東南アジアへハネムーンに出発。若鳥の羽ばたき如し空へ消えー柳志

▼岡崎祥月氏(松江市)から川柳塔まつえの二ヶ月会に寄せる書拝受。緑之助、紫吻、天痴人諸氏はか同人諸氏で盛会。なお関西見物の一部を交更して大阪へ寄ったが会えず残念、角座で漫才を見ました。

▼宮口笛生氏(奈良同人)は二月十四日から三月末まで吹田鉄道学園へ入学、近代化動力車の技術研究で現場講師としての研修をうけられた。

▼橘高薫風氏は川柳ジャーナル三月号招待席へ出句。

▼青木遊星氏(鳥取県)雅号でも変えてガンバリたいと。

▼八木摩太郎氏(堺市)は三月四日が七十二歳の誕生日で徳子夫人と金波荘から旅信「七十二の誕生と倉に妻を連れー摩太郎」。

▼山田季梵氏(広島市)呉市で石原伯峯氏らと川柳討論会をされ、各地の川柳大会へも精力的に出席しているとのこと。

▼四月の句会

▼堺・若芽合同句会は十三日六時一題は入学・我流・前東大阪市民会館。

シヨック・別居。会場は八木摩太郎居。

▼八尾菜の花旬会は十六日六時一題は仙人・気持ち・蟻さん内。

▼南海川柳会は十九日六時一題は週休二日・ひとりぐらし・日陰。会場は南海電車本社食堂内。

▼南大阪川柳会は十九日六時一題は原点・ピエロ・ひと言・焦る。会場は松崎町以和貴荘。

▼川柳東大阪は二十八日六時一題は春風・城趾・結び・ひっそり。会場は永和駅前東大阪市民会館。

ショッピング・ゾーン

梅田 一番地

楽しいショッピングとくするのさ
くらくらつくるさ
いこいを皆さんで
百貨店で



大阪梅田・水端定休

阪神

電話(06)345-121(代)

七日 午後六時

(有信新之助)

出席 浩輔・重人・新之助・与呂志・たかし・緑水・一三夫・滋雀・野迷路・古方・鶴声・柳志・千万子・摩太郎・文秋・水客・靜馬・牧人・喜風・花梢・維久子・三十四・柳宏子・肖二・綾女・百酒・一舟・幸太郎・飄太・いわを・悅郎・酔々・操子・幸代・俊夫・好一・凡九郎・美幸・敏・多志・吸江・栞・いさむ・天笑・一二三・葛城・智子・静香・君子・儀一・百合・葵水・千寿子・清人・小松園・岳人・薰風・春巳・素郎・生々庵・雀踊子・史好・之保・好郎・弥生・静歩・

細長く生きて働くし
 細いとも五尺三人の山はなれ好
 細い細い腕で仙人のを後悔す
 細い首美しと見たをかきり
 跡継ぎの線の細さが氣にか
 唯さえ細いのが回虫にとりつ
 千羽鶴折る指細し白い部屋
 負けおし細う長う暮します
 うなじ細う愛は終止符うた
 さりげなく乙女の細い芯に
 おだてられ乍ら走った細い
 細い糸けれど切れな夫婦綱
 夢二描く首の細さに咳に耐え
 細いまゆ男をだますよう描
 停退の男は細い道を選り
 細い糸いつしか太くする歴史
 パパとママ細い太いの名コン
 飛鳥川の名残りは細い川の
 細い芽が出てきて春に眼を向
 細い指からませ明日を誓わ
 細く作にたえなうて大それた
 無難なれ来りつかむ細い指
 細腕の方がたんまり貯めて居
 子の花壇ひよるひろと何か伸
 大物のあやつる糸に踊らさ
 細いから太い嫁さん捜してま
 更年期過ぎて細腕太り出しま
 細い目が付けまづけて眠く
 神経は細いが女に大胆なり
 細くながくゆここのと男けち
 話だんだん細く無心の声に出
 細い肩撫でてる程瘦せた妻
 おしやれの一つ細巻きの煙草喫う

なつとくのを行くまで話してくれず
いじわるを無意識でする育ちです
いじわるを言い合えるのも好いた仲
仲悪い隣へ樋の口を向け
いじわるもして仲のよい老夫婦
いじわるな雨でアリバイなりたつ
たまさかのセツをみだすからつ風
いじわるの脇が主役を引立てる
兄という眼がいじわるく追って来る
いじわるう返る寒さにちぢむ花
いじわるな小枝にセツくずされる
いじわるの中で田舎の垢が抜け
いじわるのいる露路犬が知っている
いじわるの方がましです薬瓶
鶯を待つ梅か香を風さめ
いじわるのであまクラスのトッパめ
折角の話の腰を折ったベル
いじわるの瞳の中の彼岸花
美しいバラいじわるな刺を持つ
いじわるな子で寡婦の支えなる
いじわるなヘッドライトが割くデイト
父ちゃんのない子が耐えている
いじわるな噂はまっ直ぐ耳に入り
いじわるで小さな優越感を知恵
いじわるを上手に使う嫁の持恵

千九郎
凡九郎
好九郎
小松園
肖二
生々庵
天笑
静馬
小松園
幸太郎
幸太郎
天笑
俊夫
雀踊子
摩太郎
一舟
重人
静歩
幸太郎
君々
生々庵
雀踊子
滋雀
文秋

子沢山番狂わせの妊娠す
プログラム番狂わせの雪となる
一斉に番狂わせへ向くカメラ

西 いわを選

柳操水文あい瓢好醉与滋一好好醉野維浩幸儀天与水鶴重好柳吸小靜馬新幸代肖靜
柳安子客秋いき太三四々々呂雀舟一郎々々路久輔一代与呂笑客声人郎志江松園馬子之助代代香

生々庵　い　わ　を　人　選　弘　生　静　観　堂　柳　信　庸　佑　晚　歩　喜　風　静　香　雀　踊　子　あ　い　き　千　寿　子　天　笑　一　三　夫　水　客　鬼　遊　あ　い　き　静　馬

之保 静歩 生々庵 あいき 緑水 柳志 柳宏子 滋雀 千万子 操子 多久志 瓢太 智子 雀踊子 生々庵 好郎 太茂津 幸太郎 美幸

川上 大輪

宛（締切五月十日）

ヒナ壇へ老母も唄うわらべ歌
ヒナ壇を出す素直な娘に変わ
ヒナ壇へ女の系図秘めてい
ヒナ壇に栄華の昔懐せてい
お雛様女三人達者です
雛壇に嘘つきさうな顔はなし
雛壇へ女ロマンの灯を点す
雛壇へ女ロマンの灯を点す

兼題「本心」

金井

文秋選

水心が酒で本心ほのめかし
本心を言えず帰って手紙出し
本心は我が身でさえもゆれ動き
手鏡の中へ本心しまい込め
あの子の本心じゃないと嫁疑ぐられ
かりそめの嘘へ本心痛み出し
札束で本心ちよろちよ見せはじめ
本心の死角を突いて引き出され
本心の裏をつけばエゴが出る
札束でたけば本心向きを変え
本心だ迷うてるぢぐはぐな返事
本心の通りにすれば義理を欠き
本心がふっと出て来たひとり
何が本心ご本人かてわかへん
気に染まぬ誘惑金にある魅力
本心は膝のコブシが語ってる
本心へ返えず言葉の影法師
引き止める客へ等の影法師
笑わせておいて本心はぐらかし
本心はどうあろうとも嫁と姑
本心は鎧の下へ覗かせる
本心を打ち明けぬうち酔いがさめ
入知恵を笑うて本心言うて呉れ
本心を吐けば本心で返えり
本心が洩れそうで吐息吐きかね
本心をうっかり忘れた祝い酒

本心に触れる盃交わし合い
本心を明かされてから迷い出し
満更でない鏡に話し掛け
本心を綴る日記に鍵を掛け
軒並みの寄付本心にそまぬ顔
この人も善人本心顔に出る
本心はどうあろうとも胎動す
養子の本心見抜けぬまに孫が出来
ホステスの本心えくぼにかくされ
相続へ本心かくすすべもなし
本心をごまかしている眉を引く
真実を訴えている眼が走り
どもってどもって本心つらぬかす
女心もう聞くまでもないそぶり
何んでもない本心を言いそびれ
企らみのない本心を喉に浮かべ
ごまかしのきかぬ本心酔いつぶ
本心が読めて女の不倖せ

兼題「手落ち」

本多

柳志選

父子家庭手落ちをかばう子に育ち
創口を皆他人のためず勘平腹を切り
手落ちを皆他人のせいにして孤独
あやまつてすむ手落ちには素直なり
この手落ちで大きくなれと祈る母
同僚の手落ちをかばう案を練る母
ご先祖を捨てた信仰の片手落ち
手落ちなく空巣戸締りして帰り
カルテには手落ちあったと書いても
板前の手落ちわさびのなない刺身
一円の手落ちが銀行の残り
録音の手落ち内緒の音がまわり出し
お互いの手落ち役所はなすり合い
妻と嫁手落ちを奪い合う平和
内輪から手落ちを責める反主流

尼緑之助氏句碑除幕式と記念祝賀川柳大会出席をかねた

出雲、松江観光さまる

五月十二日(主) 21時32分大阪発(大山2号)夜行。

五月十三日(日) 7時18分大社着。除幕式ならびに大会出席(かもめ荘)

五月十四日(月) 松江観光。15時1分松江発(松風2号) 21時大阪着。

費用・大阪・大社。一七三〇円。
B寝台一三〇〇円・一六〇〇円。
松江・新大阪一三三〇円。

一泊・二〇〇〇円。
観光雑費・二〇〇〇円。

計一〇、三一〇円
定員三十名で締切りますので、スグ左記へお申し込みください。

〒581 八尾市八尾木八一七
西尾 葉

(電0729@5725)

尼緑之助句碑除幕式と記念祝賀川柳大会とき 五月十三日(日) 除幕式10時半、記念川柳大会12時半。

ところ 島根県大社町日御崎 国民宿舎眺瀾(ちようらん)荘

兼題選者には生々庵主幹、久米雄、日満、緑之助三参事諸氏。(題・緑・神・寿・ゆつくり・正面・島・湧く。投句料三〇〇円、締切四周末日。投句先六九三出雲市塩治町梓雲荘板垣草丘宛) 詳細は前号で参照。

神様の手落ちを怨む低い鼻
手落ちなくやった安堵にある手落ち
こっちにも手落ちがあったでけり
貸し方の手落ちは倒産して気付き
神さまの手落ち女のヒステリー
手落ちまた人の命を金に換え
手落ちにはふれず写経の筆を置く
産院の手落ち他人の子も育て
神様の手落ち化粧でカバリー
顔役の顔を信じたこの手落ち
会社とはハンコひとつで済む手落ち
税務署の手落ち督促状がくる
ママ手落ち生活をよそに子沢山
棟梁の手落ちは銀が知っており
胃の中へガーゼ一枚忘れられ
造船局手落ち出そうと待つマニア
貸付けに飲ましてなかった手落ち

鬼遊 柳宏子
生々庵 幸
美幸 俊夫
滋客 崔
あいき 千万子
智三夫 一三夫
喜風 子
浩輔 風
美幸 郎
好一 郎

手ぬかりは無かった筈が又生まれ
兼題「草」 正本 水客選 柳志
千草の匂い心のしみと 雑草 花梢
控え目にみどりが冴えている 雑草 岳人
草薺も近し大地も艶を帯び 史好
春告げる草の緑を花と活け 瓢太
農薬を使い雑草にあなどられ 弘生
草の名にくわしい人と山歩くれ 千万子
一回の表が長い草野球 浩輔
草むらを警察犬が嗅ぎまわり 一三夫
山川草木ほんに住みにくうなりま 凡九郎
放課後のいつしか草にねる二人 柳 榮
草を摘む兎によしまな欲はなし 柳 榮
干草にくるまる恋にあこがれる 柳 榮
手のとどくとこに野の花露天風呂 幸太
引き抜けば草の執念土を抱き 緑水 郎

雅号ぶっちゃばなし

ほ っ く



わた な べ

渡 辺 菩 句

(11) 今ほ亡き弟、弘介が倉吉川柳会の草分け、
主宰鳴洗、柳誌「打吹」に属して、佳吟をも
のにしていた昭和三十年頃（僕は俳句短歌詩に走って
いた）その上に川柳句会に一度出席する折に「乱坊」
と命名、アルチュル・ランボーに魅せられていた僕が
名付けた。弘介が亡くなり、鳴洗さんに口説かれ、
「打吹」の編集を手伝い、俳句、その間に川柳塔同
人、けれど鳴洗さんの死と共に遠ざかり、「打吹」も
廃刊、ランボーのように僕も「乱坊」を捨てて覚悟で
いたが、作句のしない柳人として現在に至っている。
本年になり、本社句会に出張の折、気まぐれに出席、
恥さらしをする。それも川柳に未練、路郎師の「生命
ある詩をひとつ残さん」のコトバに打たれているか
らで。出発同時に改名の腹である。

喫茶「サン」経営 四十六歳

川柳塔社常任理事会（三月三日）

また印刷費の値上げである。最近半年目
に「値上げ」がやってくる。それをいちいち
読者のみなさんにご負担をかけられないので
雑誌経営もいよいよ困難になってくる。

購読者をふやすのがいかに、その活路はない
が、同人の皆さんにそれをご協力ねがうより
ほかに道がないようだ。

議題は松江観光について榮氏から報告があ
った。予告をご参照ください。

出席・多久志・形水・柳宏子・生々庵・葵
水・榮・文秋・薫風・小松園・一三夫諸氏。

草の根の私語遅しく生き給え
雪どけのせせらぎ枯れ草撫で乍ら
草に寝て母に逢いたいと思ふ
草の根を分けて見つけた石仏
なまけ者へせつと草の芽のびる
工場の汽笛が鳴った草の冷え
草におう風はこころを覗かれる
眼帯をはずせば草の色が冴え
草に目を止めれば陸下孤兒院を出て
鹿の鼻くすぐる春の芝が萌え
春の草まだまだブラントニック
ひとにぎりの土も雑草見のがさず
枯れ草に草のいのちをさかし見る
雲も子も妻も走って草の風
草千里風も太古の彼方より
草のわた飛んでも空が遠すぎる
春の草ブルドーザーに立ち向う
水客 葵園 小松園 生々庵 素郎 春巳 薫風 酔々 小松園 天笑 柳志 智子 肖二



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

川柳たけはら

森井善居報

勤めねばならぬ入垣かきわける 静光
お若いと言われハムはまだ確ける 静光
美しきかなベッド並べて老夫婦房水
朝寝するつもりへ日曜日のお客蘭子
剃刃がもひとつ乗らぬ朝を客蘭子
歩きたい夜だ白い道つづく 幸美
恋知って星のしずくとだいい 文晴
なによりも母の達者な初春で 蘭子
掛金が上った程に貫われず 笑
旅先で呼ばれチャン付けうるたえる 不
公害を許してならじ初日の出 紅
笛吹けば妻が喜々とついで 朽
冬柿の甘さのしみる夜の集い 子
夫との対話ほのぼのミカンむく 東
視界ゼロそれな男歩かねば 貞
自問自答みな私の味方です 青
すき間風俺の弱味を突いてくる 文
点滴へ生きる願いの眼をつむる 明
あびるほど飲ませてあげたい父は病み 詩
味しめてから小説のように 雅
戦争を知らぬ中二の軍歌集 政
ライバルの意気に感心して負ける 路
どんぐり川柳会(大阪市) 居
谷垣史好報 水

ゆっくりと歩けば風が追い立てる 修
娘にも内ポケットにある秘密 小
悪気流山の油断は記事になり 松
油断なく小虫も守る尻を振りし 園
幸運と思えながらも愚痴を出し 風
幸運な話素直に喜べず 史
幸運の蔭に涙の積重ね 好
つつましく生きて幸運アテにせ 宏
幸運をかみしめていて調べ 悦
捜査官内ポケットより調べ 郎
ゆっくりと遮断機下りてくる 郎
中年の野心眠っている内ポケッ 幸
ポナスを大事に入れる内ポケッ 重
秒針よりゆっくり廻る日もあろ ね
ぶっそうな凶器もひそむ内ポケッ 凡
内ポケット不渡手形ばかりなり 呂
内ポケットで顔色のない廻わり 生
脱皮まだ蛇ゆつくりと這い廻り 路
晩鐘の余韻にゆつくり腰を上げ 子
内ポケットにホステスちゃん知 川
聴診器ゆつくりはづれている 柳
立志伝達がよかつたことも 柳
赤銅の肌に迫力せまる 河
迫力の余韻満場にまだ残り 原
実の子にない迫力を弟子に見る みの
喰度俵にします瞳に翳りなし 近
それ見たマラソン選手一日本 江
悪いことの一三二は皆日三 聖
長男も牛も居らない空が澄み 雨
牛歩でもよしみなさまと批判 山
牛知らぬ孫子守りの絵を共に 越
トラクに肥牛積みつつ楽しめ 村
牛鍋を越えてお猪口が行き返り 無
何よりも気休めとなる子の寝顔 聖
一蜻蛉 声

気休めに遺影へ託を云うてみる 素
気休めに云わず握手の目がう 志
気休めの言葉失う事故 舞
気休めにあがた葉が効いた 八
暖房へ大胆に脱ぐ女房 初
暖房の中でマネキン 音
川柳わかやま 垂井葵水報
一匹が動けばさわぐ鯉一家 千
錦鯉己が値打ちを知って 寿子
信濃路の妻の故郷の鯉料理 佐
仲裁を笑って夫婦仲直り 庄
仲裁を笑って夫婦仲直り 美子
仲裁を笑って夫婦仲直り 美子
正月のページへ抱負した派手 里
正月のページへ抱負した派手 美
鯉釣った話手の音痴も愛嬌 栄
鯉釣った話手の音痴も愛嬌 栄
一月を冥土の塚と茶化した嬌 美
貴緑という腹の中のどきどき 裕
貴緑という腹の中のどきどき 美
貴緑もなくて気ままな一人 子
貴緑もなくて気ままな一人 子
池に佇む二人は鯉をみてい 照
池に佇む二人は鯉をみてい 照
まな板の鯉にも言い分あり 富
貴緑は床を背に跳ねて 三代
躍り出て恋に跳ねて 武
一月の月が暗着から取戻 三
正月の月が暗着から取戻 三
貴緑は羽織の紐となつて 大
松の猿のさすがと思う尻 博
松の猿のさすがと思う尻 博
糸を買っている鯉は身構え 四
糸を買っている鯉は身構え 四
鯉の血にささえられて 保
鯉の血にささえられて 保
小正月元旦の計半ば消え 四
小正月元旦の計半ば消え 四
賞月元旦の計半ば消え 保
賞月元旦の計半ば消え 保
鯉コクへ舌が故郷を想い 郎
鯉コクへ舌が故郷を想い 郎
川柳東大阪 竹中肖二報
南無遍照その足跡に清水湧く 葵
南無遍照その足跡に清水湧く 葵

佳句地10選(前月号から)

金井文秋選

振返ればなんと曲って来た道よ
果しない欲望さくろの口が裂け
人生の迷路とふ板ばかり踏み
人間の特權夢をつみかさね
点字読む指へ必死の血がかよい
その裏があつて哀しき人の性
溝だけが整理正しく造成地
人形の汚れなき瞳を子に信じ
欲のない子にはカバンが重たすぎ
張り板が忘れられての納屋の隅

壽美子
文明
修史
西合
無一
幸一
鬼遊
扇水
綾女

各地柳壇賞創設

各社ともに「各地柳壇」は孤島化している
ようです。そこで本社では「佳句地10選」を
毎月ご通報ねがっている幹事諸氏を順番にわ
ずらわせ、これを他の選考委員によって優秀
句をきめ、このページの向上を目指し、しか
ば新年句会などで

▼次号は「川柳塔まつえ」の岡崎祥月氏選。
▼題が兼・席題で七題として、三才だけを発
表しても二十一行です(本らはは出
席名簿ではあります)四月以降のご通報は
二十一行以内に厳守ねがいます。その二十一
行はご通報者のご自由に使ってください。
▼原稿はかならず二十字詰原稿用紙を使つて
ください。便せんの原稿は、いまいち字数を
かぞえる煩雑さがあり、活字と原稿用紙の一
体化をご認識ねがいます。(編集部)

足跡が構図になつてくる砂丘
言い訳けのつかぬ濡れようして帰
朝露に濡れた草踏む関病記
濡れてからもう慌てない歩幅もつ
逆さクラゲ不法駐車が濡れて
単色のレッテル地酒の一升瓶
大学出と言うレッテルに欺される
偽レッテルの方がはるかに味
主婦連の瞳がレッテルに光り
レッテルはローマ字だけの日本製
目尻など気にせず仲居受けなが
お多福の目尻は嘘のない笑い
親方の指図違反の家が建ち
指図する気かと友へめがけ
一徹も孫の指図で馬になり
指図するような感じの手紙来る
棟梁の指図キヤリアが生きて
鶴橋で飢をしのいだ日を想い
漢口も北朝鮮も居る屋並み
金井文秋報
南大阪川柳会
現実地球を取り巻く重い雲
天下り見込んだ程に合わず
現実にかえり寝返りする枕
喧嘩しながら兄弟かばい合
金借りるコツを覚えて店じまい
本人はちつとも異色と思つて
妥協して異色の色が褪せて
一零落ちたら父はもう責め
異色やと思つてはならそうし
見栄はつて女異色にあきたら
成功をすれば異色も見直され
現実麦飯知らない農家の児
コツ知らぬ奴の一途な馬鹿力
コツ覚えた頃にとぎれる手内
使われて居る気でひとを使う
古松園
小松園
肖宏二
柳宏子
ひろお
綾女
万の的
柳志
儀一
三十四
鶴声
雀踊子
喜風
一文秋
悦郎
思二
誓月
好一
好一
滋雀
柳志
好文秋
小松園
柳宏子
牧人
凡九郎
好一
喜風
鶴聲
誓二
百合
儀一

現実のきびしさ知ったアルバ
弱る手足にまなざしは落ちて行
落ちそうな首旁組に支えられ
実習生手を抜くコツも見てま
現実と夢の差人生の吹きだまり
現実のどこかに匂う野獣主義
現実のきびしさ気ばかり若うて
現実をいかにしにして論議
劇場を出ればなしの待て論議
無駄話させれば異色の人持ち
無駄話に生きる娘の夢抱いてや
目まけた異色女房がくなくなり
現実にかえり女房がくなくなり
和歌山七面句会
見物をする顔の方が面白し
噴水の風向きベントの恋逃げる
盆栽に水やる夫の一人言ふ
読書感のあとあたかし冬の雨
読みとつたつもの裏の裏読み
新聞を読みつつ妻の愚痴も聞き
パンダちゃん見物客を見物し
見物は今も変らぬ江戸の花
吊皮に何する人か原書読む
この橋も水のきれいな頃のもの
九分通り出来たはなしへ水さ
見物に他人の目でない一人
お上りさん見物どころかデモに
水飲めば水の味する健やか
吟足は女の凡て水鏡
清張の手の内解るほどに読み
堺・若芽合同川柳会(堺市)吉岡青香報
自慢して着ている柄の悪い趣味
会うたびに一度は自慢する男
またしても自慢話を聞く欠伸
室内の飾り新たに春を待ち
幸報
さち子
葵水
光治
杏林
政治
清三
芳童
陽一
清和
城石
茂津
富次
勇夕
三幸
其幸
青誓
千香
藤子
持子

嫁 娼 初 初 背 評 初 初 高 仲 最
 ぐ 姿 見 姿 仲 が 評 夢 い 人 愛
 の 見 夢 夢 の け 夢 び 橋 の 愛
 近 見 夢 夢 の け 夢 び 橋 の 愛
 初 で 夢 夢 の け 夢 び 橋 の 愛
 夢 福 顔 す 倒 け 期 思 姿 思
 ま 向 小 見 する ち 延 思 思 姿 思
 で け 出 母 の セ 遅 思 思 思 姿 思
 う 左 しい の し ル せ 強 見 愛 連 れ
 れ 向 にも 背 い ス マ 強 見 愛 連 れ
 し け し の 中 恋 ン さ し え 嬌 ず れ と
 常 千 神 健 博 亜 青 美 真 泉 大 酒 丸 中
 夢 夢 田 坊 泉 成 谷 露 人 永 山 井 山 西 野

○ペンペン草○

★四月は新年度、新学年の月。これとは関わりなく川柳塔では雅詠選者が四月に交代する。これは十月創刊から半年目に当たるだけのもの、選者で、その頃、半年めに選者が交代していたため、それがそのまま今日にひきつがれただけのことである。★各地柳壇のスタリをちよつと変えることにしたからこれも新年度とは関係がなく、いいことは早目ということ。★新選者になると、句者側はちよつと、とまどわれることと思う。新学期に新し

▼葉子コーナー▲

使はたし、自費も未遂事件を起こしたのである。

★ボクがうっかり彼らの甘言にのって「新しい先生方を紹介します」とか、かんとかオオタテに乗ったらエライ目にあうとこだった。

★最近では歌手養成所になにかクサイのがある。

★川柳にしても、そう簡単には人気作家になれるものではないです。

(不二田一三夫)

本社四月句会

日時 四月七日(土) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275 番

柳 話 菊 沢 小松 園

兼題 「日照権」

「指紋」

「怪文」

「ミニター」

席題 三題 当日発表

西 八 西 児 島 与呂志 選
木 田 柳 宏子 選
摩 天 郎 選
尾 榮 選

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷仲之町20

川 柳 塔 社

5月の兼題 「スペース」 「泥」
「昼下がり」 「買い占め」

集

募

六月号発表(4月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選

水煙抄(10句) 北川 春巢 選

課題吟(各題5句以内)

「庭」 森下 愛論 選

「代読」 平田 実男 選

「久しぶり」 舟木 与根一 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

七月号発表(5月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選

水煙抄(10句) 北川 春巢 選

課題吟(各題5句以内)

「祭」 有信 新之助 選

「甘言」 和田 一乃字 選

「名士」 北村 三步 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

サイボーグと遊ぼう!



世界

3月17日(土)→6月13日(日)

主催 サンケイ新聞社

宝塚ファミリーランド

阪急宝塚駅下車徒歩5分

入園料…こどもも150円、おとな300円

定価 二百円(送料十六円)

半年分 千二百九十円(送料共)

一年分 二千四百円(送料共)

昭和四十八年 三月二十五日印刷
昭和四十八年 四月一日発行

編集兼 中島 蓬太 郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 542

発行所 川柳塔社

大阪市南区鯉谷仲之町二〇番地
電話 大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚 焼 餃子
焼 餃子
又 焼 饅

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL(641)0551-2



＜出張店＞ なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストア／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

姉妹品大和錦印



柔道衣
剣道具

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海サービスチェーン

<ホテル・旅館>

◆白浜温泉

国際観光旅館 朝 日

国際観光ホテル ホテルパンフィック

◆勝浦温泉

国際観光旅館 中 の 島

◆湯峰温泉

国際観光旅館 湯 の 峯 荘

◆新和歌浦

国際観光旅館 萬 波

◆徳島鳴門

国際観光旅館 鳴 門

国際観光旅館 鳴門公園ホテル

◆紀北橋本

観光旅館 紀 の 川 苑

◆泉南淡輪海岸

観光旅館 淡 の 輪 苑

◆大阪なんば ホテル 南海

お問合せ・お申込み 南海交通社
日本交通公社・サービスチェーン
大阪案内所 06-(631)-0222



南海電鉄



一番よい酒

うまい酒

清
酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影